

# 毒消し売りの生活史（1）

佐藤 康行

## I はじめに

従来の農村・漁村の社会学的研究は、家と村落を対象にしておこなわれてきた。その背景には、農漁民の行動が強く家と村落に規定されていたことがあげられる。その点、現代は家も村落も解体され、現在の農漁民の理念と行動はもはや家や村に抱摂しきれものではなくなっている。そのため、農村社会学ではなく、こんにち農漁民の個人を対象にした農民社会学の研究が必要とされている。社会学のなかにおいては、1960年代に現象学的社会学やエスノメソドロジー、ライフヒストリー（生活史）などが構造機能主義に対して異議を申し立て、新しく登場してきた。これらの方法は構造機能主義のように人間を役割や地位に還元することなく、人間を解釈しつつ行為する行為者として措定し、社会はそうした人間の相互行為によって形成されているとする見方に立っている<sup>1)</sup>。すなわち、それらは生活者の視点から日常生活をとらえる観点にたつて、人間と社会をとらえるアプローチを採っている。生活史の方法は生活者の視点から個人の日常生活の歴史をとらえ、「社会・文化の構造とその変動を一層深く捉え直すために有効な」<sup>2)</sup>方法である。その点、民衆の思想ないし精神を汲み上げようとする民衆史とは多少とも視角を異にしている<sup>3)</sup>。本研究は、これまでのような農漁村の社会の構造的な研究からではなく、庶民の日常生活の歴史である生活史を通して日本近代の諸相をとらえかえそうとする試みである<sup>4)</sup>。

本研究の目的は、毒消し売りの行商に従事してきた女性がどのような人生を歩んできたのかを振り返り、家制度下の農漁家の生活を具体的にとらえるとともに、どのような人生観や世界観を持って生活を送ってきたのかをとらえることにある。その上で、毒消し売りの女性たちが作ってきた独自の「行商文化」なるものを、資料の積み重ねの上で再構成していきたいと考えている。

あらかじめ調査対象地と行商について紹介しておきたい。越後の毒消し売りは新潟市の隣町、巻町の浜方を中心としたこの地方独特の商いである。「毒消し」とは、巻町の浜方の女性たちが行商で売って歩いてきた薬のことである。春に毒消し売りの女性が紺緋の着物に手甲脚絆のいでたちで遠く商いに出かける姿は、新潟の風物誌を成してきた。もともと、この毒消しはいまは廃村になった角海浜の称名寺に、その由来が伝えられている。この毒消しを出稼ぎに出ている大工が飲んで腹痛などがすぐに治ったことから世間に知られ、広がっていったとされ

ている<sup>5)</sup>。そして、明治以降角海浜を始めとして角田浜や五ヶ浜、越前浜などに住む女性が続々と毒消しの行商に出ていったのである。

坂口安吾が毒消し売りで有名な角田浜を訪ねて、さぞや貧しい村を想定して来たら、どっこいそうではなくて、豪華な造りの家々であるのに驚いている。

「部落の中に踏みこむ。奥へ踏みこめば踏みこむほど、ものすごい。貧乏たらしいボロ小屋や貧しそうな農家などは見当たらない。半数は農家という構えですらない。邸宅というべきだ。それらは門構えをもち、土蔵や倉をもち、石組みの塀をめぐらし、庄屋の屋敷かと思うのが無尽蔵に次から次へ現れ出でてくるのである。」<sup>6)</sup>

こうした堂々たる家を建てられたのは、女性たちが毒消し売りの行商に出てきたからこそであった。漁業とわずかの田畑を耕して生活を営んできた半農半漁の村、その貧しい村を変えたのは、ほかならぬ女性たちの力なのである。

本稿が事例として取り上げる人は、現在新潟県の巻町の角田浜に居住し、毒消し売りの出稼ぎをしてきた篠田美代さんである。篠田さんは明治41年生まれ(1993年の調査時で満83歳)、夫は明治40年生まれである。家の屋号はセイジウロウである。尋常小学校卒業後、彼女は母親に連れられて毒消し売りに出て行き、戦後は主に金物や衣類などの行商に従事し、行商は73歳まで続けられた。行商生活はその間実に60年の長きにおよんでいる。村には浄土真宗の願正寺と日連宗の妙光寺の二か寺あり、篠田さんの家は願正寺の檀家(門徒)である。

## Ⅱ 毒消し売りの生活史

### <初めての毒消し売り>

ここの部落はみんな商いに出たんですよ。よその人は、ほら、親たちが行かない、百姓で行かない人はよその人に頼んでね、みんな娘たちはね。「可愛い子には旅させれ」ってわけで、旅させに出したの。だけど私はお陰様でね、親がほら、百姓でなかったから、親と一緒にいったわけですよ。親とおばさんとね、ほうしてあの栃木県の矢板ってとこに宿とって、そこにいたんですよ。そしてずっとほら、まだねえ、13……学校卒業ぐらいだから。荷物しょってさあ、歩くのがねえ、恥ずかしいやらなにやら。まあ足が痛くなってさ。そしてその頃はわらじだったでしょう。いやあ、足の裏にまめができてねえ、病めて病めて仕方がないたって1日休むわけにいかないんだ、田舎だから。まあ東京あたりにいけば、まあね、みんなが行ってこえば足が痛いからって休んでいられっけど、栃木県で私の歩く所は次から次、泊まり掛けて歩くの。だからそれができないでしょう。だから本当に足が痛くて、お昼休みしてあんまり……お寺にお昼食べて休んでたったら、お寺の奥さんが私の足見てね、涙出してるんだ。かわいそうにこんなね。膿んでね。周り真っ白くなって、まあ、足着くことができないほど痛かったの。ほうして、「今度はこんな時は少し冷やしてやったほうがいいから」、そう言ってさあ、洗面器に水入れてね。そして冷やしてくれて、早く切って膿出せばいいんだけど。それがおっかなく

て、皮が厚いから膿出すたってほら、皮、足の裏だから、いやあ、本当に因果見てね。でもまあそのうちにだんだん、まめだから治りましたけどね。足、慣れないから毎日歩くでしょ。だからわらじだからねえ、足にまめができちゃったの。

最初はねえ、おばさんと、お母さんとさあ、私と3人でずっと3人で泊まりがけにね、歩いたの。そのうちに今度はほらまたやっぱ、そっちこっちから連れてってもらいたいなんて、ほら人が、親の行かない人や何かがね、あってさあ。今度は5人になったり7人になったりまでしましたよ。そうして今度はずっと宿は借りてるもののねえ、荷物はもう何にもない。薬ばかりでしょう。だからまた、ねえ、売りでがあるんだよね。薬だから、まあ売りでがあってねえ、20日位ずつねえ泊まると1包ずつほら小さな袋にさあ、いろいろしょって歩いたって20日くらいずつには歩けるの。そうして今度は自分の着物やなんかみんなほらね、しょって、あの、包んでさ。荷物はほら薬だから、軽いでしょ。そうして歩いたんですよ。うん、だからそれからだんだんだんだん、ほらその頃はまだお得意さんもないわさ。何にもないから、「よござんすか」、「よござんすか」って歩いてはいたけれど。だんだんだんだん年数がくったら、今度はほら、お得意さんができてね、うんと。今度はやめる頃になったらね、もったいなくなっちゃって。どーこの家いったってねえ、「毒消し、よござんすか」なんて言ったことないでしょう。んだ、「こんちはー」、「あらおばさん来たね。お茶どうぞ」。そう言ってやね、どーこの家行ってもあがりこんで。あーん、そうしてお弁当もって行ったって、ほら農家歩くんだからね。「おばさん、そんな冷たいご飯食べないたって、あったかい家に炊いたから食べな」。そう言ってやね、お弁当なんて持っていったってほんとにね。お得意さんで、はい。慣れてきたら、わかりきってさあ、うんって（うんと）よろこばれてね。「うん、おばさんが、一番いいおばさん。何でも間に合うからおばさん」。その頃になったら、はい、今度は何でも売ってるんですよ。

#### <金物売り>

んだ、その次に今度は、最初は薬ばかりで、その後は今度は何年か過ぎてから今度は金物。ほら、新潟の三条の金物さ、包丁だの鋏だのああいうのひと通り持って歩いて……。金物売ったの、終戦前ぐらいだったよ。うん、終戦ちょっと前ぐらいだと思ったね。へえ、忘れちゃったよ。戦後は今度ねえ、ずーっとその後はまだ金物やら今度はほら、あの、化粧品たってほんとのクリームはねえ、マダム・ジュジュとかさあ。ほんとの年寄りのような使う、そういうそんないろいろは持てないからね、それに今度は髪に付ける油、油持ったりさ。そんなことして歩いた。それから今度ね、何年か過ぎたら今度衣類を売るようになってさ。今度まーるでこういうのをね、売ったんです。その頃になったら今度はみんなが楽になってね。年寄りたちもほら、年金もらうようになってからかな、最初の頃ね。

#### <油売り>

油、そうして瓶詰めばかりじゃないんだね。ぶら下げてさ、一勺（いっせき）いくらずつ

に量る油ね、下げて歩いたの。そうしてその、下げて歩くはいいが、運が悪いとねえ、入り口に置いて、そこに置くんだと思って、置いてまさか持って上がられないでしょ、油だから。汚いから。そうして置いてうっかりしてるとね、子供がまあ、ひっくり返すんだ。そうすると、いやまあ、ガブガブと出れば、まあ捨てることはできなくてさあ。いや、ひどい目にあってね。あらーっと思ったってどうしようもできないでしょ。まさかその家に「弁償してせい」とも言わないしさ、言われないし。ほんとにあの油ぶら下げて歩く時はひどかったね。ジョウゴからほら、その、升からみんな入って口を大きくあけてあるんだよね。んだ、そこへ今度ほら、あーあ、口が開いてるから、ちょっと横にしたくらいで、油だからみんなこぼれる。出るんだよね。そんな思いもしたしね。

頭に付ける油。まーるで、年寄りがね。油一勺あのところ 15 銭ずつだったの。「あー、毒消しやさん、油が欲しいけど銭がなくて買えないよ」って、15 銭の油もね、昔は買えなかったんだよ。そして今度はたまに、「今日は若い手がだれもないから、おばさんの油付けたくてしようがないけど、お金が一銭もないから、米一升と変えてもらいたい」。米なんて重たくてしようがない。やだけどさあ、かわいそうだと思ってね。「じゃあ一升分置いていきますか」。置いて、「すまないねえ、じゃあ一升分持って行ってください」。そいでねえ、米と交換ですよ。今度その米しょってあるいてさあ。そして宿へ来るまでその日はずーっとねえ、しょって歩かなくちゃならないでしょ。ほら、まさか人に米もらってきたとは言えないから、隠してさあ。そうしてね、持って歩いて。そんなこともあったすね。いや、いろんな目にあったよ。ほいでばかにされることもあればねえ、まーたく日光の方へ泊まり掛けに行って、そして日光の製造所に勤めてるほら、あー、長屋っていうのかなあ、なんて言うの、ああいうほら、みんな勤める人たちがあある、あの、あれがあるでしょう。そういうところ行ったらねえ、「なあ、今晚どこへ泊まる」、そう言ったから、「今晚はね、どこへ泊まるんだか。うん、泊まる場所はまだ定まってないんだ」。そいで、そこらはまだほら、めったに行かないから、泊まるってもないしさあ。お得意もないしね。そうしたらその家で、「かわいそうに、おばさん、毒消しやさん家に泊まっていきな」、そう言ってね、泊めてもらったの。そうしたらその隣の長屋の奥さんがさあ、夜遊びに来たんですよ。で、まさか日光あたりに泊まって農家の米なんか買わなくたってね、その家のできたの呼ばれて歩くんだよね。んだけどほら、町場だから、その家のお米までもらえないでしょ。んだから、米買ってきて、そして一升買って来、そして一升買ってね。んで、夕飯食べてたところへ、そのとなりの奥さんが遊びに来たの。ほうで食べたったの。「まあ、毒消しやさんてたいしたもんだねえ、そいだからあの一、こちとらでさえ、麦飯だったのに、毒消しやがまあ、あの一、米の飯食べてる」、こう言われてね。まあ、それこそまあ、私もまあ若かったから親たちもお母さんとおばさんとねえ、「人ばかにして」って思ってやっばいたんでしょけど。それがほら、商売のもとだからね。何にも言えないんだよ。そうしてやっばり、だまーって食べていたったら、そのうち、今度は帰ったんだよ。そうしたら、帰っ

たらその旦那がねえ、「けしてそうこんなに行商して歩く人はせつなくて行商して歩くんじゃないんだって。あー、それ以上に家のほうはね、楽なんだけど、これも商売で来るんだから。けして人なんて見下げるもんじゃないよ」って、そう言って、その自分のかあちゃんに言うてるんだよ。はい、それ聞いたらちっと、ほら、胸が下がったでしょう。そうして今度ねえ、そんな時もあったし。

<お得意さんが海水浴に来る>

最初の頃は全く、「毒消して越後の人ってどんなとこにいるんだろ」って、思ってたんだろ。やっぱり商いに出てるからね。わしそんなにほら、「家はこんなだあんなだ」、なんて誰も言わないわ。商売のもとだものね。あんまりいいなんて言うと、今度はほら、人に信用してもらえないから。やっぱり大変だよ。せつないんだよ。そうしてほら、いるでしょう。そーって今度ねえ、だんだん慣れてきたら、今度むこうのほうから「あの、新潟へ見物に遊びに来たい」って、「海見ながら遊びに来たい」、そう言ってね。その時2組（ふたくみ）来たんですよ、初めてね。そしたら1組（ひとくみ）、うん2人ずつ。親とあのほら、息子と。今度あの一、ほら、どっちも母親と息子、来たんだよ。2組ね。ほーで来てねえ、どう思うたら、「あーん、毒消しやさん、どうするや。あの、すまないね」って、「お世話になるんで」。「だいじょぶだよ、寝る席ぐらいあるでしょ」って言うてるんだよ。そんなに家は広いからなんて言えないでしょう。「寝る席ぐらいね、大丈夫、ありますから。まあ行ってください」そしたらね、今度駅行ったら、1組あの人我也去く、あの一、どこそこの人我也去く、この人我也去ってことを言わないでさ。ほうしたら今度はほら、自分たちだけだと思ったから2組でしょ。ほうしたら1組の人見て、「ミーヨちゃん」って、そう言って、私はほら美代って名前だから。ほいでねえ、「ミーヨちゃん」さ言って、「はい」って、「どうするや、2組も行くんで」って、今度はこうなったの。で、「大丈夫ですよ。2組いたって休む席ぐらいあるから。心配しないで行ってください」、そう言ってつれてきたらね。この、これがま蔵、建てたばかりだけども、この家の前にねえ、大きな家で蔵づくりだったんだよ、家はね。ほうしたら今度、ほうして玄関のほう、ほら蔵づくりだから直してさあ、へー、表玄関こうこしらえてはったでしょう。ほうしたらそこへ来てねえ、「さあ、暑いから、おはいんなさい。どうぞ」ってば、「はあん」、そう言って、外から入いんないんだよ。さあ、早く入って。さあ、暑いから汗、ぬぐう。汗とりにお入んなさい」、そう言ったら、「なるほど、おばちゃん、毒消しやさん、寝る席はあるって言ったけど、どんなとこだと思たらこーんなにでっかい家なんだね」、なんて、今度はたまげで。「何にもね、家はでかいって何にもないんだよ。あばら屋なんだから」、そう言ってさあ、いたら、まーるで、喜んでね。2晩、3晩ずつ泊まっていたのかな。ほして、一緒に、今度は4人（よったり）が帰ったら、部落は違うけどね、よったりは帰ったの。ほうしたら今度はそっち聞かせ、こっち聞かせ、みんな聞いたでしょう。いやまーるで今度はねえ、「ほんとは行ってきた人が一番わかる」、そう言ってね。まーず手の裏返したようにね。むこうの人

が信用してくれてさあ。「あー、毒消しやさんの家は表玄関があるんだってね」とかさあ、いやどうかだなんて言われてね。

まあ、それから今度はだんだんだんだん、今度はほら来るようになってね。そして今度は海水浴場、ほらまん中の人たち（美代さんの長男夫婦）は海水浴をしてるんだ、家でね。ほしたら夏になるとほら、何つうの。海水浴だから、夏来るでしょう。まーるで「おらも行くから行くから」、そう言ってやね、まるでいっぺんに20人ばかり来たことがあるの。だけど海水浴場はね、泊まる席がなくて。ほら素茶屋（すじゃや）だったでしょ。だから泊められなかったんです。だからみんなね、家のね、座敷から茶の間からそっくり使ってさ。ほしてそこへ寝かしてね。そうして「自炊する」なんて言って、てんでが持って来て。そうして、「釜貸せ」、「鍋貸せ」、そう言ってさあ、自炊した人もあるし。そんなことして何人もほら、泊まり賃なんてほら、とうとう、もうね、お世話になる人だからもらわないでしょう。そんなことして喜んでねえ。だんだんだんだんに大勢来るようになってさあ。いや、これは大変だ、これは敷布でも何でもあんまり別なのばかり出しちゃみっともないからと思って、今度は巻いた天竺の大きく巻かってたの買ったりさ。布団だったってね、あんまり敷き布団に掛け布団敷かせても悪いと思って、今度はまた敷き布団買ったりさあ。そうしてたったら家に今度はほら、民宿するようになったでしょう。今度はほら部屋があるから、今度はこっちがほら、だんだん今度はね、私のいた頃はまーるでいっぱい来てくれたの。だけどこの頃は、ずーっとはい、十何年と行かないからね。今度ほら、ほして、遠いでしょう。栃木県からだから。だけどやっぱりまだね、いまだにね。

<お得意さんとの付き合い>

「あのね、おばさん、越後のほう雪が降ったのに、野菜で困るだろう」ってことをさあ、ほら、テレビで見てるでしょう。前に雪の降ったことがあったんですよ。その頃ね、「どんなに野菜を不自由して食べられないかと思って」、なんてって。何にもねえ、ま、顔は知って、なじみだからわかるたって。他人様がまーるでそれこそニラだってやら、サトイモだってやら、大根だってやら、葉菜……ここらはそんなにね、降ったってそんなに野菜食べられないほど、ほら深い雪降らないのにさあ。テレビ見てや、「かわいそうだ。おばさん何にも食べられない」、そう言ってや、そんなの送ってよこしたりさ。今だにね、送られてくるよ。「まったくねえ」って感心するよ。まーるで、ああ今年も送ってばかりもらちゃいられないからね。やっぱりこっちでかえってお世話になったと思って、夏早々とあの、ハウスのスイカができるとき、あっちのほうスイカがないから、スイカほら、2個入りずつになってんだ、今小さいから箱がね。そんなのねえ、送ってやるの。そうすると、またも今度は、今年ね、もう来年から送られないから、それだったらはい、「今年年とっちゃったから、今年だけだと思うからよっぽお世話になったんだから、そのお返しのお気持ちの印なんだから、なーんにもしないで下さい」、そう言ってねえ、ことわるんですよ。電話でね。そうしてるのにや、また送られて来るでしょ

う。全く、困っちゃったなあって。世話にばかりなってるのに、そう思ってやね、いるんだよ。親子以上ですよ。親だったって子だったってそんなにねえ、いちいち子供たち……私も2人あの、川崎に一人娘がいるし、千葉に1人いるんですよ。片づいているんだけど。そんな子供がほら、もっとも子供は、はい、こっちのほうわかるせいだか何だか、誰もそんなの送ってよす人もいないのにさあ。まーで栃木県のほうからね、ちょいちょい何か送られてくるの。

そう、お得意さんでね、まーで懇意にしてたんですよ。だから懇意にしてたね。前にあの、トウモロコシ、ほら家でそこに屋敷でつくってたった時、トウモロコシやね、送ってやったの。だけど、トウモロコシも今度はい、家建ったらほら、向こうの方ほら、もっとも買った屋敷だったんだけど。今度、忙しくて売ったんですよ、そこを。その隣の方さ。そうしたら、はい、トウモロコシもつけれないから、今度あれしようと思ってさ……。

#### <鑑札>

毒消しはね、その頃はずーっと営業組合ってのがあって。その組合からね、仕入れてさあ。それから今度ねえ、会社ができたの。で、あの会社と昔の営業所、なんつったかなあ、生業組合（営業組合の誤り）っていうのかな。そういうのと2つになったの。そして、そのねえ片っほの方は安いんだねえ、少しね。だけどほら名前が違うでしょう。昔からあったのと。私はねえ、昔からの方がいいと思ってさあ、昔からの方がいいと思って。あのう昔の人によって、今度はその情報を得る人もあったけどね。情報なんてとらなくなっただけいい。昔からのほら金証丸は本間の金証丸とかさあ。ほら毒消しは橘（の印）とかね。昔の手合いの名前でしょう。んだから、そればかり売ってました。安いのも、それだっただめだし。そうして昔からは、でてる限りはね。毎年ああ、あのう、何日だ、何だかほら、あのう、夏になるとね。1軒ずつ、あれがあったんですよ。そのう、講習会がね。その講習会に出ると、今度ほら出て、そうして今度ほら出て、どうして今度は鑑札受けるわけ。そうしてそこへ出ればほら、鑑札はほら、受けられるんですね。そしてね、しかも金はかかったんです。まあ、今だから、あの頃はまあそんなになかった、今はね1万ゆうくらいかかるでしょう。そうして1年限りのね、はい。今年の何月、4月からとか、3月からはい、12月まで決まってるね。毎年そうしたの。んでね、なかなかはい、金も大変だ、そんなのに入らなくなっただけ結構、薬ばかりじゃないからほれ、衣類だのさ、今いろいろ売られるからなんて人もあったよ。みんなそういう人もあったけど、もしほら、ね、富山がおっかないんだよね。富山がほらおんなじ商売でしょう。んだからほら、鑑札があるかないか、そんなの聞いてほら、運が悪いと捕まる……。「鑑札なしで商売してる薬だ」と、こうこられるんだよね。それが、おっかないから終わるまでね、いっぺんも鑑札休んだことないの。うん。ほんとの私はくそまじめてんだけどね。おっかないから、そうなるからね、間に合わないでしょう。

#### <講習会>

講習会はね、大勢の時はね、あのう、小学校でやったの、越前小学校。そうして角田の人と、

越前浜の人とね、集まってね。新潟のほら、衛生課の方からさ、薬事衛生課ってのかな、そういう人たちがきていろいろお話聞かしたり。あのう、勉強するってね、年寄りの勉強だから、たいしたことはないけど。いや、何葉はほら、何と何と入ってて、この、かざぐすり（風邪薬）になるとかさあ。腹いたの薬はそんなに何とかと何とかと配合して、その胃腸薬になるとかそういうの聞かせてね。向こうで聞いただけでこっちから別に質問も何にもやれる人もなかったからね。そうして毎年ねえ、講習会ってのがあったの。それから今度ねえ、はい、年とるまでやってたから、今度その後新潟へ行くようになってさあ。こころほら、越前や、あの、あら、角田の人はほら、売る人は、出る人はすきなくて（少なく）、講習受ける人はすきないでしょう。新潟へねえ、2、3回行きましたよ。新潟行ってねえ、新潟の何……会館さ言ったろう……。そういう所行って。ほら今度は富山の方からも来る。新潟県だったってほら、あの、水原のね、あっちの方にも毒消しはできたんだね。そっちの、水原でなくて、まだ先だったかな……水原って言ったかな……。それから今度ね、あの、何、苦い薬、そういうの百草園ね。お百草ってのは、今度はね、ずーっと高田の先の方だったろうかね。そこらからできるんでね。そこらの人も一緒にね、講習会受けたの。そこに行くようになってから、方々の人がほら、みんなね、受けに行ったでしょう。それでもやっぱりいちんち（1日）かかるんですよ。ま、お昼はほら、先から出るけどさあ。それに今度はお昼代だってやら、今度はそれ受けて、受けると今度ほら、あれや、来るの書いたのがね。それで持ってほら、鑑札受けられる。1年ずつの鑑札が受けられるようになるんですよ。まあ、その頃なんてね、何人も行かなかったよ。んだからね、私50年まで出なかったけど、ずーっと年増の人から自分の親はあの、あの、県知事からね。あの、ね、他国（たこく）行ってお金とってきてくれるってわけなんでしょう、県の方ではね。それでね、私のお母さんの時は、あの、重鉢（じゅうばち）ね。3つ、あの、3段、3段のね。いい重鉢だったれ。こう、金のね、何だかあの、鳥のついたような印のついたさ。ま、だんだんだんだん、今度ほら、すきなくなって。ま、大勢ね、大勢で、大勢になったったって、あれでしょう、受けない人もあるし。私ん時はね、今度、この、こういうほら、あの、お盆、かぶせぶたの、これではないけどね。こんときもらったの。その50年からやった人にそう言ってくれたんですよ。んだけど、50年にまだたなくなっても、はい、それ以上の人はずーっともらってると、今度は自分の番、番の方へ来るんですよ。40何年ごろかなあ。もう、40何年ぐらやってからかなあ、岡田、誰さ言ったかな。岡田誰さ言ったあれ、あの県知事さんは。

うん、その人の時私ね、今度はあの、かぶせぶたのお盆、お祝いにもらったの。そして賞状とね。そんなことで、それからはい、なんにもない。そんなことないわ。何十年なんていったってほら、あっちこっちだしさあ。すきないからね。くれないけど。そんなだったよ。

講習会開いたのは8月……のね、末頃だったね。たいていね、8月の末だったね。

### <元払い>

あの、帰ってくるのに最初の頃はね、5月の半ば頃行って、ま、10日過ぎになると早い人は、早い人も遅い人も行くけど、たいてい5月のね、13、4日から4、5日頃までに、向こうへ出るんですよね。そうして行ってね、そうして今度は5月、6月、7月、8月さ、9月のね、末か、10月の始めに帰ってくるの。そうして10月の、はい、1日頃までにはさ、今度はほら、4日がほら、お祭りだからね。そのお祭り前にはみんなね、大勢それこそねえ、いっぱい……。あのう、東京の方行く人なんて、あの、臨時列車がたったんだよ。そんなになって行ってもね。それまでにはみんな帰ってくるの。そうして帰ってきて、今度はお祭り過ぎるとすぐにほら、こう、あの、何だほら、みんなの集まりがあるんだよね。行って、行商人に行った、行ってきた人の。そうして12、3日頃になるとね、9月の14、5……3、4日頃かな。その頃になると今度は、「元払い（もとばらい）」、そう言ってほら、お金、みんな借りて持っていく時はほら、ただ、借りて行くでしょう。その時はこの、「元払い」って日が決まってるね。そうして今度は、その日みんな薬屋さんがいっぱいほら、組合だから大勢来るわ。何やさんも何やさんもみんな持ってった人たちがねえ、お金取りに来るの。そうしてその時お金払って、そうして今度はねえ、払ってからその帰ってきて。

### <離婚した人>

たとえいくらでもさあ、今度は家へほら、あのう、お金、やらなくちゃならないでしょう。んだから、まーず、あの頃ね、嫁さんなんてかわいそうな人もあったんだよ。まーるで、子供ができてさあ。できたってのにほら、やっぱり商いは運のいい人と悪い人とあるんだよね。そうして商いがね、やっぱ運が悪くてとれないような人は、まあ、そこから離縁になった人もあったよ。うん、私たちの仲間でね。

1人男の子が生まれたばっかだったのにさあ。んだ、今度はね、旦那の方が先、みんなそれもほらまた、旦那がほら、いろんなあれ（女）も作ってさあ。出たんだとばっか思ってたんだ。いなくなったってから。そう思ったらね、それでもそんなことはその当座は聞かなかったが、後になって聞いたらね。ほうして旦那がいないとこに今度は嫁さん、子供がいたっていられないでしょう。そうして今度は子供連れてね。そうしたら家でね、お芝居やったんだって。この嫁では、商いに行ったらほら、食べてけないから。それでね、出しちゃったの。その子供が……そうして今度は男の子は、昔は男の子はほら、長男でしょう。長男が一人生まれたって、長男だから連れては出られないでしょう。で、その子、かわいそうに置いてさあ、そうしてその女は出てね。今度はまたほかに、再婚したけど、かわいそうだって……。角田の人だよ。そういう人があったの。

私だっておなじ友たちだったけどさ。や、まーるで、秋になってそのお金、「元払い」になるとね、商いが細くて。ほら元も払えない、えー、どうとかだ。ずーっと気許してたんじゃまたね、大変だからね。まともに一生懸命になって商いをどうにかこうにかあって売られ

ば、損はしないよ。いくらか儲かるように出来てるんだから。んだけどほら、若いとね、やっぱりそんな、いろいろな気持ちの人があるから。あんな誰に見せるんじゃない。はい、親方持ちの人はそんなことないの。親方に毎日とってきた金やらなくちゃならないでしょ。だから、そういうね。親方持ちの時はそんなことないんだけど。今度は自分でほら、何とか一人でやられるようになると、今度は一人で仕入れて。今度はほら、お金出さなくても、見せなくたっていいでしょ。そういう風になるとね、その、お金払えない、元も払えない夜逃げしたことがさ、そういう人がポツポツあったよ。まあ、うん、数はいっぱいないけどね。ほんとにね、この部落はね、その、商いができなくちゃ暮らして行けないとこだったんだよ。今はほら、どこでも何でもね、工場もあるし。どこでも働きさえすれば、金になるけど。ここらはなんにもねえ、田舎だからねえ、働くところもないばさあ。んだからみんなほら、「毒消し売り、毒消し売り」、そう言ってね。はい学校卒業すれば毒消し売りにはいる、やることになると決まったようなもんでさ。どこの家だったっけね、お寺か、それこそ学校の先生の子供でもない限りは、みんな出したんだからね。まーったくもう、「元払い」の後は、かわいそうでさあ、せつなかったよ。そういう人の話聞くとねえ、ほんとにね。商いさえ何とかなれば、それでもまあ、ほら、この部落はね、いいかったんだ。

いやまーんず、今度「元払い」の場になると、みんな嫁様たちほら、「娘たちはいくらくれた」って親たちは自分の子だから言わないからわかんないが、嫁たちの話だ、みーんな嫁たちが出るんだからね。そうするとや、あそこの家が「嫁はいくらくれた」、はあ、「この嫁さんはいくらか」って、部落だからたちまち聞こえてくるんだよね。そんなでねえ、やっぱり、大変だったんだよ、うん。栃木県からお金持ってこなくちゃね、それこそ小遣いってのとれないんだもの。漁師したってさあ、なんだって、みんなが暮らすほどほら、かたまって暮らすほど漁師もできないでしょう。漁師はとれないんだから魚も。んだ、今度はほら、田んぼや畑はね、そんなにいっぱいないから、それにつかまっていたって、お金が1銭もないでしょう。食べるのは取れてもさ。米だったってね、何も、何反もないから。食べていくだけでそんなに売れるほどないでしょう。んだからね、世間からお金持ってこなくちゃ暮らしていけなかった、この部落は。

#### <行商中の子供>

うん、食べるだけはほら、畑もね。やっぱり、2反や3反はあったしさあ。田んぼだったってね、まあ、いっぱいある家なんて、1町なんて作る家は何軒もないでしょう。あとみんな5反だの3反だのさあ、普通はまあ、3反、4反くらいが普通くらいだったね。あとそれより少ない人もあるしさ。んだからね、とつても家の方は今度はほら、年寄りとほら、男たちがあの、毒消しに出らんないでしょう。ほうで、だからね、子供連れて商いに行くのせつなかったよ。かわいそうでね。連れていくとお守（もり）がいるでしょ。自分で薬しょったり、子供おぶったりできないでしょう。今度は泊まりがけなんだもん。毎日日帰りでないからね。そうすると

ね、子守やるの1人ずつ頼んで連れてかなくちゃなんない。んだ、今度、1年おっぱい飲んでる時は連れて行くども。はい、明るる年になるとね、はい、あんよがつくでしょう。そうするとね、今度は、子供もかわいそうだし。親もほら、せつないし。子守のお金もかかるからね。連れて行かないの。食べさせてやんだらね、お金くれなくちゃなんないでしょう。子守連れてけば。そうすると今度は子供置いてとかわいくてね。初めて子供産んだっていうのに。長男置いて、まあっでそれがおっぱいでも出なくちゃ仕方ないが、おっぱいがまだいくらでも出るんでしょ。たった1年連れて行ったんだもの。まあっで、商いに行っただって商いが身にならなくてね。「あん、毒消しやさん、子供さん大きくなったろう」って聞くの。そうすると「はい」、何にも言わないで、涙がほろほろほろほろ出てね。「どうしたの、どうにかなったの」。「いや、どうにもならないけどね。あのう、大きくなったけど置いてきたんだ」。「やあだよ、まだおっぱい飲んでたのに」。「おっぱい飲んでたっただってね、連れてくっと大変だから置いてきた」、そういうとね。「ああ、やだな新潟の人は親子別れ、夫婦別れしてくるんで、なんて言われてさあ。何にもね、子供のこと聞くと、はい涙がほろほろほろほろ出て、商いが出来ないんだよね。そうして、はあ、「今度はね、この次は今度あんたがたと交代だ」って言うんだ、俺が。そうするとね、「なんで」、「だっっておらばかりまた今度の世にもまた」、今度のね。親子別れ、せつない思いしてばっかりいられないもの。今度あんたがたは親子別れ今度はするようになって、おらは今度はこっちの方の人みたいに、今度は親子別れも夫婦別れもしないですむようになるんだ、そう言えばね。「おお、いやなこと。新潟の方へなんてとんでもない嫁になんて行けない」、そう言ってね。よーっく言われ言われしたけどさ。そういう思いもしたしね。

今度だんだん、それからほら、そう言っても子供2人3人連れて行ったね。後は今度ほら、戦争騒ぎになって食料がやかましくなるとね、米もほら思うように買えないでしょう。旅だっただっただって持っても歩けないでね。んだ、今度はその時2、3年休んでさ。そうして今度は、後また2人産んだけどね。3人、(いや)2人産んだ。でも、ほんとにね子供置いて。で、あの別れるほどつらいことはないね。まったくあんなにせつない思いなんて何だっただってねえ、おっぱいは張ってきてまあっで痛くてこの、あの、「あの子のところにまで投げてやりたいなあ」と思ってみたりさあ。そしてや、「ここらにおっぱいの足んない人はない」、そして泊まるとやね、宿の人に聞くの。「近所におっぱいのない人はないでしょうかね。おっぱいが張ってせつないんだ」、そう言うと、「ああそうか、どこそこの家じゃねえ、ミルクだから。じゃ、ああ、その、借りてきて飲ませてやるかい」。「ああ、そうしてください」、そう言ってやね。そしてその、子供ほら、今、あの時は何にもね、そんなにいいも悪いもそんなことないからねえ、なんで喜んでね。「ミルクはひとかた助かるよ」、そう言ってさあ。「また明日の朝も連れて来て下さい」、そう言ってやね、飲まして歩いたのね。1週間くらいせつないね。おっぱいは。そのうちにだんだん飲まなくなるから出なくなるけどさ。

今度はその子は家へ帰って来たっただってね、4か月半もいるでしょう。はあ、今度ねえ親な

んで忘れてしまうんだよね。いや全く、赤塚の駅まであのう、ばあちゃんがほら、リヤカーに乗せて、迎えにくんの。そしてあの頃はほら、今みたいにね、その、バスもないしね。そうして迎えにきてね。赤塚の駅へ来て、来てるんだわ。て、新潟に泊まってくんだからあんまり遅くならずには帰ってくるの。ほうして荷物があるからほら、リヤカーも引っ張ってくるんだ。ほうして、はあ今度はほら、「おっかちゃんが来たよ」、そう言っていたってまあだね、かあちゃんなんて側（そば）にいたってわかんないで。「まだ汽車来ないね。あの汽車行っちゃったね。まだ来ない。今度の汽車にかあちゃん来るんだ」って、側にいるのにさ、そんなこと言ってね。忘れてしまうんだよ。いや、ほんとに親子、せつないなあ。こんなにね。ほんとにはい、けんかしたり何かしてればそんなこともないだろうけど。そんな普通になってって、そうして家のためだと思ってさあ。はあ、こんな思いしなくちゃなんないかと思うとねえ、ほんとに涙が出たよ。せつなくて。そんな思いよっぱら（よっぽど）してきた。

#### <嫁勤め>

結婚したのはねえ、昔、20歳（はたち）だったよ。なんにも結婚もさあ、昔の人ってまったく、今はそれだけもう、世の中よくなったと思った。私もすぐは、向こうの方の家の生まれなんだよね。ほうたらほら、ここの人ん所へねえ、まあ、もらいたい人もあったんだろうって。あったんだろうのに。親たちがね、決めなくちゃだめなんだよね。ほうしてもう本人だったって、「自分でこれが欲しい」、そういったってね、自分で欲しい人連れてくることできなかったよ。そうして今度ね、やーでも親の決めたのもらわなくちゃなんないでしょう。は一、もうせつない、まったく何にも百姓なんて鋤鎌持ったこともないのに、今度百姓屋へくれて。自分で、「かあちゃん、おれ、百姓屋へ言ったって鋤鎌持ったことできないから百姓はとってできない」、そう言って。「誰も腹の中から覚えてきた人なんてないんだ。みんなね、覚えてね、やってみてやっとならるんだ」、そう言って。親にはそりゃあ怒られるしさあ。はあ、ほんとに鋤鎌持ったこともないのに、やっぱいくらかここでは百姓してたからねえ、浜の方もほら、何にも浜も出る人ないからね、出たことないでしょう。

んだ、今度ここの人、ここの家でも、地引き網だのさあ、鯛だの、そういうの出るんだよね。百姓はね。ここ、嫁が、あの、来るまでは、ここのうちはね、お母さんもね、おシュウトさんも商いなんて出たことない家だったの。んだから、百姓はまあ一で上手でね。ここのおシュウトさんは上手で、体は小作りだしさあ。まーずくるくるくる回った人だったけどね。商いが嫌いでね。何にも売りに行ったことないでしょう。働くのは上手なんだけどね。そうして今度は来て、何にもそれこそほら、野菜も何も作らないから売りになって、ねえ、昔はそんな買っても食べなかったよ、ザイの人はね。んだのにねえ、「葱売りに行け」、そう言ってねえ。「はあ、葱売りに行けたってどんな人が葱買ってくれるんだろう」と思ってさあ。心配で心配で、ずっと一晩中ろくに眠らないでね。朝に今度はほら、持ってみんな4本5本ばっかずつや、こう、縛って洗ってね。そしてその頃ねえ、天秤でもって担いでさあ。そして巻まで行っ

たんだよ。ほうしたらねえ、「どんな人が買ってくれるんだろう。どうしよう。葱ってのはどういう人が買うんだろう」、と。これ、全然わかんないからさあ、それも「行けない」とは言えないんだよね。仕方なしにね、行ったら、あの、巻の少しこっちにね、あの、割前って部落があるんだよね。ほんとの巻のすぐこっちに、そこ行ったらね、まあって、土手の方へみんな八百屋さんがいっぱい買いに来てんの。「あらー、八百屋さんが買いに来てたな」と思ってさあ、ほうしたら、「おまえの葱いくらだ、俺が買うから、全部買うから」。全部この人に売って、あんまり安くてさ、家のに怒られると悪いから。そんじゃ半分売ろうと思ってさあ、「半分だけね、それじゃ買ってください。半分まあどんなだか小売りしてみるから」、そう言って。何にも小売りも卸もおんなじ……おんなじ値段。何にもね、そんなに特別高く売れないんだよね。「はあ、馬鹿くせえ、早くにあそこに卸せばねえ、楽しんで来られたのに」と思ってさあ。それがほら、わかんないからね。いや、そんなこともしたし。

今度はモチグサの頃になればモチグサ、ワラビになればワラビをばあちゃんが取る手にね。今度は商いに行かない限り私が売り手でしょう。まったく内野のほら、あの、新潟のそこにあるでしょう、内野って。そこまでね、やっぱり天秤で担いでさ。ワラビ、小さな小束にしてさあ。まあ、えっさえっさ、肩が痛くて肩が痛くてね。どうしようもないって、やっぱりんだって、担いで行かなくちゃほら、行けないでしょう。いや、帰りになると今度は天秤のやり場がないくらい肩が痛いから、はい、空っぽのその、肩へ乗せたくなくてね。今度はふたっつ、あのう、ざるふたっつ今度は重ねてそうしてね。そうして、担いでさ。そして天秤を杖ん棒みたいについて、そうして帰ってきましたよ。そんなのも昔の人はね、どんなんたって親が「せえ」て言えば「やだ」ってこと言えないんだもんね。あれはせつなかったなあ。

#### <野菜売り>

葱なんてのは春だわね。春、お祭りがほら、4月の4日がお祭りなんですよ。だけど、今度はだんだん今度ね、その、4月、普通なら行かないんだけど。今度は今ごろになると、はい3月になると、商いに出かけてさ。ほして3月頃ね、またお祭りに帰ってくるの。

おシュウトさんは毒消しに出てなかったの。それで、野菜を作ったの。百姓専門にやったの。私の（実家の）お母さんはね、百姓はなかったからね。毒消し売りしてたんですよ。

野菜はそれから今度ね、売るのはあったんですよ。今度はほらその内に、今度塩をとったでしょ。塩とればまた塩売りしたりさあ。まあ、私、家にいたってね。そんなにあの、百姓はその代わりできないんですよ、ほらそんなことばかりしてるから。だけど、商いだけはね。でも、なんとかかんとかやってっただけだよ。

そうだねえ、野菜の方だったって、おばあちゃんが、死んでからもまだ、やったけど。まだ毒消し売りやめる2日目までは売ったね。だけど、おばあちゃんが死んでから、取れなくなってからさあ……。いなくなってから、ほらワラビなんか取りにいかないから。売らなかつたけどさ。ワラビだとかさ、家で作っているのは葱だの、葉葉（なっぱ）だの。大根みたいなもの

売ったよ。大根みたいなものは、その時になったらもう牛がいたから馬車で、馬車でやね、売りにいったの。

### <イワシ売り>

そいで今度は、イワシに、ジイチャンがよっぱら（よっぽど）出てたけど。春のほら、大羽イワシね。今度ジイチャンが出なくなって、倅が出るようになったでしょう。そうすると、倅が出るから。まあイワシ売りにもね、まるでそれこそイワシ売りばかり。おれあんまり人にたまげられたの。で、おかげさまで運がよかったんだね。まるでよその人がね、3日も4日も5日も続くことがあるの、イワシ取りね。で、船のてえがたいていね、9人か10人くらいずつが1つの船がね。それが仲間でしょう。1つの船が。で、陸（おか）に上がると今度は分けて売るでしょ。分けるようになって、3日も4日も続いてイワシがほんとにでないといばと思えば、また出た。「せつなー」そう言って、みんながね、「夕べなんて9時頃やっと家に来たよ」とか、「10時頃までかかったよ」とか言うんだよね。だけど、私はね、そんな思いしたことないの。おかげさまでね、そうすると、イワシが大勢取れるところは娘に、ジイチャンが出てる時は倅もいたでしょ。倅とリヤカーで自分の子供連れてさ。そうして行くとね、まるで自分が主（ぬし）見つかるし、子供に今度は「付け売りはするなと」。「お前ここへ頭この家に持ってこい」、そう言ってね。まるで売り買いは朝主（あさぬし）はしてるの。ちょっとぐらい人が10円で売ったら、あの頃なら8円でも9円でもいいから。「1銭1円安いたっても買い手があるんだから」、そう言ってね。そう言ってや、あるから。人がまだ「イワシ、イワシ」って。イワシもね、お昼になるとね、値段が半値以下になっちゃうんだよね。ほら、腸が出たり、暑い時でしょう。春の、ほらあったかい時だから。そんだのにね、なーんにもそういう時になると、ちゃんと売ってしまっただね。ちゃっかりしてさ。そして、そこらに休んでるんだよ。「まだ、イワシ。ああ、かわいそうだなあ」。まだお昼も食べないでね、朝飯もイワシに出ると食べられないんだよ。

おにぎり一つずつね、リヤカーで引っ張って浜端（はまばた）のところに行くまでに食べて、それが朝飯でしょう。今度は分けるとすぐに、まあ、割増（わりまし）で先に先にとほら、売りにかけるんだから。まるで、それこそね、松山あたりまでがね、本当にカタカタとまるでガラランガランかけて行くんだよ。それなのにね、今度売ってしまわなきゃ食べられないでしょう、お昼も。お弁当持って行ってもさ。お昼食べてられない。売るものがあるうちはね。そんなん思いした。私、イワシの時だけはね、誰連れてっても、今度はそのうちに、倅が嫁連れて行くようになる。嫁が来た。で、倅が出るようになったでしょ。そうするとよ、「さあ、おばあちゃんさな、今日行こう」って。で、スケない時はね、「かあちゃん、車に乗って」、「いまから、朝から車に乗らんねえわさ」、そう言うと、「いや、かあちゃんが行くとね、売るのに楽だから。車に乗ってもいいから、売ってくれ」、そう言って、行って売るとや。「なんだから、お前はゆっくり休め、朝早いんだから」、仕事だから朝そんなにね、嫁より遅く起きるでしょう。「お前、

朝早いんだからね、お前ゆっくり寝れ。ひと眠りでもしていったほうがいいよ」、そう言ってね。「まだイワシ、イワシ」と言ってね、そこら売りに歩く人が見えるんだよ。「ああ、かわいそうだなあ」、そう思ってやさ。で、朝ね、少しくらい安く売ったって、かえってね得なの。「イワシ、米1升とか、いやお金で100円とか」、そう言って。

町場のうちにいたんじゃあだめ。町場の人にはしつこくてね、町場はしつこいよ。まけるどころか欲が深くてね。こうしてだまって遊んでも、朝のうちはね、イキがいいから高く売るように。ちょっと巻の向こうまで行くんだけど、巻にちょっと払って(売って)行こうと思ってさ。ちょっと寄るんだよ。そうすると、「イワシ、イワシ」って言うと、まるで買いに来るの。そうしてね、車見て買いに来るんだけど、5匹くらい買う人はね、15匹もね、蓋出して下から取ったりかえして、こうして並べてさ。いくつ買うと思えばさ、5つぐらいしか買わないんだよ。そう思って黙ってこうして見てるんだ。だけど、あんまりいじるとね、腸が出るんだよ、イワシはね。すーぐにね、腸切れるの。「あなたの身体、見ればそんなにたまげて身体大きくないが、あなた欲が深いね」、そう言ったら、「なんで」。「なんでだったって、深いでしょう。これだけね、どれだけ大きい食べれば大きくなるの。大きいたって、小さいたって、1匹は1匹だし。人間だったってね、でっかい人だったって、小さい人だったって、やっぱり1人分の仕事しかできないでしょう」って言うの。「それを、15匹も20匹も出して、そこからまたいいとこ捨うなんて。そんなに欲の深い人はやだ」、そう言った。「人がせっかく買うっていうのに、このオバアチャン、この人はなんだか、かんだかばかり言ってすかや」。「いや、買ってもらうのはありがたい、おら売らなくなっただけいい」、言ってね。みんな、みんなイワシが傷んでしまうでしょう。だからそう言って。「ザイのほうが一番いい」、そう言って。ザイのほうに引っぱって行くんだよ。そうすると、みんな「100円とかさ」、「米1升とか」、そう言うから減りも早いしね。ザイの人はそこのとこはいいね。なんにもね、やるのを取るし、またこっちだって小さいのばかり捨ってやらないでしょう。上からそっくりね、自分で慣れた人が取ると腸でないんだよ。そういう思いもしたよ。「町はやだな、町の人はやだな」、そう思ったね。

そんな時ね、2回ぐらいしたよ。だけど、イワシ売りはせつない思いしなかった。夜の8時9時までなんていたことないもの。たいていお昼前にはね、おかげさまで売ってさ。「どうしたんだ、あなたは一番いい」って言うから、「おれ安もん売りだからね。早く売れるんだよ」、そう言うと、「安もん売りがかえって高もん売りになっちゃうの」、そう言って、みんなに笑われてさ。だって、10円だ、何円だって言たったってさ、じきにね、3匹1円ぐらいになっちゃうんだよ。あの、あれになると。3匹1円ぐらいになっちゃうんだよ。あの、ほら、腸がでちゃうと。また、町の人はそのような買う人もあるのね。そういうのを好む人もあるらしいんだ。だけど、腸がでるとね、くっちゃりして、目玉が真赤になってやだね。

朝方だらね。10円ずつぐらいで売ればいいほうだったね。たいていね、「朝飯10円だろう」って言うんだ。けど、いっばい買う人には8円でも9円でもオレは売れ」って言う

んだ。自分ばかりでなくて、連れて行った子供に言うんだよ。そうすると1円安くたって、また買い手があるんだよね。だからね、そのほうがよっぽど得なの。そうして、今度ね、ひとつきり、ほらあんなにイワシでも何でも売れない時があったでしょ。捕まえられる時があって。そういう思いをしたよ。まったくずっとね、なんだったって80何年も生きてるんだから。どんなもんもしたよ。

#### <塩売り>

今度、塩を売りに行ってさ。あの、塩を始め釜で焚いて、ずっと家に作ったり、仲間で焚いたりして、そいで今度乾かして売りに行くでしょう。売りに行って、その時はほら米がない時は、農家だったってあとになればそんなに余ることはないでしょう。だから、みんな貸付けて来るの。そうして彼岸の中日だったんだよ、その時は塩取りは休みで、それでないば天気の良い限りは塩をこしらえない。干しに行かなきゃならないの、浜へね。だけど、その時ね、中日は休みで、そうすれば家で遊んでいられればいいけれど、今度は塩売りでしょう。そうして、塩売りにリヤカー引っぱってさ。米をもらいに行ったんだよ、その時早稲ができてね。で、米もらいに潟頭っていう所に行ったの。巻の先の。ここから行く時はさ、運送箱っていうのかな、あれをいくつか積んでさ、行くの。もらってこようと思ってさ。早稲ができたからと思って。あの頃は、巡査が厳しく取り締まっていたよ。……

#### <毒消しの製造元>

毒消しの製造元は村に5軒ぐらいあったのかな<sup>7)</sup>。角田だけでもね。大越さんとか、佐藤さんとか。私はね、やっぱりほら部落だから、ちょっとずつは仕入れたけど、一番多く仕入れたのは大越民蔵さん。

実家のおかあさんのすぐ近所だからね、そこから仕入れたの。そんな付き合いからね、一番いっぱい取ったの。また、血の薬だとか、いろいろな薬があるでしょう。血の薬つつうのはね、青木さん。青木正二って。その家はまたね、粉は散薬だったけどね、血の道（血行をよくする）の薬がでて、「その家の薬はまた利きがいい」なんて言ってさ、それ売ったし。今度は「胃の薬は一心丸」、さ言って。大越末三郎って家でね、一心丸みたいな薬作っててね、そこから。だから、会社の薬なんていくら安かったって、名前が違うからね、私は売れなかったね。

この薬はここがいいというのがあったの。やっぱり特別ほらね。それで今度は曾根の本間様は金証丸と神経痛、りゅうまのいいのができたんだよね。それ、本間様は、金証丸は本間様が一番有名だったね。今度はみんなほら、やたらに薬剤師の免除のない人は作るのができなくなったでしょう。そうしたら、今度はみんなやめてしまっってさ。みんな薬剤師の学校なんて出さないから、できなくなったの。で、巻の小林さんつつうのがね、やっぱりやって。そいで製造するのは吉田の何て言ったかな。そこから製造してもらって分けてもらって、自分の名前で、小林さんたちは出したの。最近になってからね。

製造元はみんな昔は薬事法に入っていないってやられたんだね（することができた）。み

んなやってたんだもの。今度やかましくてね、薬事法がやかましくてとってもね、そういう名前のない人はね、製造できなくなったの。

#### <慰労会>

(実家の) おばあさんはね、(家の初代から数えて) 3代目ですよ。婿取りだったんだから。それでも娘を連れてちょっとは栃木県のほうに行ったんでしょう。だからね、秋になってね、元を払ってしまうと、今度は製造元でね、ひとかたけ(1回) ずつみんなにね、慰労会させるんだよね。ほいで今度ね、どこの家どこの家さ言って。何人何人ってそう言って、いっぱい取る人はいっぱい取る家に行くでしょう。そうして分けてやると、東京やら、宮城県行く人もあれば、福島に行く人もあれば、まるで北海道まで行ったんだからね。本当にほうほうに、みんなてんでにやっぱし、ほら最初に行った所に行くんだから。まあ、いろいろ昔の思い出話し、商い先の思い出話しがでるんだよね。東京のほうの人だってやらさ、ほら群馬のほうの人だってやらさ、いろいろ埼玉だってやら。そんな話しが出るとね、なんだか話しを聞くとね、栃木県のほうの人たちは人がよさそうだったよ。一番栃木県のほうの人たちは人がよさそうだったね。みんな、ほらいろいろ話しを聞くと、「いや、ここはこんなだよ、あんなだよ」、なんて。みんなてんでの本当の思いの話しをするとね、まるで矢板のほうは、山のなかでね。せつないけど、悪かったけど、「これいいほうだなあ」と思ってね、いたよ。人がいいんだよね。栃木県のほうの人は、なんだか。商いに行った人の話しを聞くと、やっぱりいいほうだったよ。

#### <おばさんと一緒に行商生活>

ずっとね、おかあさんたって親だからとっても年でしょう、途中でやめたでしょう。そうすると、まだおばさんがいたったけどさ。おばさんと今度一緒に、ほら、いたった。で、また人も、弟子もいたったしさ。なんかあれして、いてって。今度、あとになってからね、自分でやっぱり矢板がよくてさ。本当に始めから矢板は宿で、矢板のほうの人は本当に、はあ、親子みたいになっちゃってね。

ずっと、代が変わっても、あとをね。おばさんもずっとやっぱり一緒にいたったからね。おばさんもしかもいくつになるまで歩いたからね。おばさんとはしばらく一緒にいたけど、おかあさんは早くやめたんだよね。

(おばさんとの) 会計は別ですよ。てんでにね。まさか仲間でばっかりいられないでしょう。だからね。歩いたったって、同じところにいたったって、ほら、お得意が違うと同じ場所に行かれるしさ。また、おばさんのお得意に私が行く、私のお得意のところへおばさんが行くなるとすると喧嘩になるからね。そういうことは絶対しないことにしてるの。おばさんのお得意さんには私は行かないし、私のお得意にはおばさんは行かないからね。近場に行く時は一緒に行く時もあるし。また別のところに、毎日ね。会計も違うからね。そうしてたった。

(お得意さんは) 150 軒くらい、近場のね。今度矢板が通えるようになってから、東京と、都会と同じで、泊まりがけでなんか出ない。1 晩も泊まりがけで出ないの。そこへ毎日ね、バ



いないで、たまに雨降りて今度家にいるんだから、近所だって大事だと思ってさ。今日は家に休んでいたから「お茶飲みに」言うと、みんな近所のばあちゃんが遊びに来るん。だから、どこへもね。「何が楽しみだ、映画見るのが楽しみだか」、なんて聞かれたって、そんな楽しみはいっぺんもないの。なんにも。そういうとこへ商いに行っているとね、行きたくないよね。やっぱりお金取っている時はね、一生懸命働こうと思うせいか、なんだってなんにも、それこそ本当に帰りざわになってからやっただよ。その冷蔵庫の小さいのを買ったの。ストーブも買わないでね、そうして今度のご飯は焚火でもってさ、釜で炊いて。そうして、その薪はちっとは買うけど。薪は買うけど。そいで、その「焚きおとし」はね、炉が切っているから、今度はその朝でかける時にはそれにあたっては出るんだよ。ほら、危ないから。もっともね、炭なんておこしてられないでしょう。んだから、たまに炭屋さんも知ってて、炭持ってって、「おばさん使いな」。貰って来たってね、雨でも降らなきゃあねえ、炭おこしている暇ないんだよね。だけど、とっても冷たくて、朝晩寒いんだよ、あそこらは。ものすごく寒い、朝晩ね。それから、そうね、やめる10年と経たなかったろうかね、すぐ近所にストーブ屋があったって買えないでさ。「若い人ならこんなになってられないのにね」って。その小林さんと2人でね、「おらばっかり2人だから、こうしてられるけれど、こんなに不自由ばかりしている人はないね」、そう言って。2人で言いながらもね、買えないわけでもないのにさあ、そんなにかたくしてやってたの。だけど、とっても寒くてね。今度「ストーブひとつ買おうよ。いくらもしないのに。そんなにせつながっている必要はないでしょう」、なんて言って。たとえ1万何千円だったか、1万6000円ぐらいだったかな、それ2人で初めて買ってさ。そうしたら、いいなあ、朝にも「焚きおとし」であたらなくなつてさ。こうストーブつけばあったかくなるものを、夕方帰ってくればね、火なしのとこへ来るんだもの。「まったくこんなに便利がいいのに、なんであんなことしたろう」、なんて。今度は2人で笑ってね、言ったども。そんな生活したの。

#### <仕入>

金物は三条の金物屋さんが来るんだよ。まるで、卸しに来るの、矢板に。そういうところはまた便利がいいんだよね。んだけど、ほら、そういうのだとかさ、ズボンみたいなのは、やっぱり東京にね、何さ言ったや、あれ。秋葉原って言ったか。そこの隣の、何さ言ったや。そこへ仕入に行くんだよ。そこへ仕入に行くと問屋さんがいっぱいあってね。シャツみたいなもの、こんなのだよ。安もんがあるんだよ。まるで、それからね、前掛けね。前掛けばかり問屋さんがあって売るんだよ。そこへ行ってや、前掛けね、それこそ100本も200本も買ってさ。そいで、こういうのだとかさ、安いズボン、こういう安ズボンなんだよ。冬もんもあるけど、夏もんが、春秋はくような薄いね。そういうズボンだの、そういうのが安い。そこからみんな仕入れてね。まるで2人でやっとしてよって来るんだ。出せば軽くしてこられるけれど。出すとね、今日のうちに間に合わないから。そいで、朝6時に出かけてね、ほいで早い汽車に乗ってさ。

そいで、小林さんのところへ行くと、まだみんなね、同じ毒消しやでも、小林さんのところにいる人たちはまだ出ないで家にいるんだよ。そこ行って、知っている人から、友だちからさ、そこへ連れていってもらおうの。問屋さんへ、初めて、分からないからね。何べん連れて行ってもらっても、またね、なかなか慣れないで。そうして、「今度送りますか」。「いや。送らなくなっただけしよって行かれる」、そう言って。2人でまるでどっさりね、しよって来るの。そうしてしよって来て。2人だから、ほら、同じの2品ずつ同じのを、ほら、分けるのに都合がいいから買ってさ。ほいで、今度宿に来てね、定価つけたり、分けたりだ。まったくね、それでもよろこんでね。あといいのはね、東京の小林さんがそういうのを出すんだよね。その小林さんから、高いようなもの、品のいいようなものを取ってさ。そいで、巻の曾根のね、たねともさんという人からいろいろ出すから、その人からもどっさり取るんだよ。そうしてね、売ったの。

#### <荷物代>

んだからね、朝出かける時は、バスに乗るのに荷物代取られて。「おばちゃん荷物代」。国鉄は慣れっこだからね、取らないの。朝早いのに乗るとね、迎えに行くバスだから。ほら、行く時は人が乗ってないでしょう。それにばかり行くんだよ。私、国鉄が多かったがね。ほいで、行くとね、「荷物代取らないの」。「おばちゃんだから取らないよ」。「どこまで行くの」。「どこそまで」ってって、停留所でないたってね、「ああ、あそこの家に寄りたいたいんだ」、そう言うのと、「あそこでいいのか」。「はい。そこに降ろして下さい」、そう言うのと。ちょうど自分の行く家の木戸に降ろしてくれるんだよ、また国鉄は。「本当にね、まったく国鉄のお世話にばかりなってる」。「おばちゃん、お客様だもの」そう言うてやね、笑ってさ。ほうして、今度は行く時になるとね、国鉄は、ほら、いま1人の時も最近になってからあったが、前は、前の頃は車掌さんがついていたでしょう。車掌さんと運転手さんと2人で、誰もいない。乗せに行くのに乗るから、からっぽだよ。そうするとね、餡みたいなのをたまに買って行ったりしてさ。お茶菓子みたいなのを1袋くらい持って行ってね。「まあ、お世話になっているから、これひとつ食べて」、そう言うのと。「いいよ、おばちゃん」。「いいって言われて、なんだや。いいでねえか、誰もいないから食べなさいよ」、そう言うのと、喜んでさ。「すまないなあ」。そういうようなこと言って。そうしてもらおうと嬉しくてね。たまにそんなこともしなくちゃ。本当に世話になったよ。

#### <夫の召集・入隊>

お盆にはね、戻って来ない。なにもなければね。4か月半ずついるんだよ。ずっと一時期だもの。まあ、帰って来るようになれば、たいへんだけどね。それでも誰か具合が悪いとか、何とかあれば、来ないでいられない。

まったく、おじいちゃんが3回召集受けたんだよ。一番最初の時は、一番最初子供を産む時は、8月の18日の時に産んだんだけど。8月になってから、「お盆が来たから、おまえ家に帰

れ」、そう言ってね、おかあさんたちが言ったんだよ。「お盆に帰ると、仏さんになるとわるいから、お盆過ぎてから帰る」、そう言ってね。いまみたいに何でも決まって、ほら、わからないでしょう。だから、いつやら、なんだか、日もわからないば、予定日なんてなかったでしょう。んだからね、「お盆過ぎてから帰る。仏様になりたくない」、そう言って。いたったうちに、はや18日の朝になったら、産んだんだよね。17日の晩からさ、明日帰るっていうのにさ、なんだか腹がどうとか。なんにも用意していなくて、家に来て産むつもりだというのに。はよ、そこで産んでね。しかたない、産婆さんの家にね、まさか借りてる家だったって、自分たちだけが借りているんならいいけれど、荷物置くだけだから、人のいる家に居たでしょう。だから、そこには居られないさ。しかたない、今度は産婆さんのとこに行ってね。で、3週間置いておいてもらって。そうして、それからまた3週間過ぎて。その子をおぶいながらそろそろ商いしたし。うんで、今度は2人目の子は9月に産んだ。9月の20日に産んだんだけど、その子はね。ちょうどお彼岸がね、来たから、「家に帰る」って言って。家に帰ってきて産んだし。今度は、その次の子は今度は大東亜戦争におじいちゃんが、16年に産んだ子ですよ。15年のいつだか帰ってきて、16年にまた召集受けてまた行ったんだよ。ほうしたら、その子ね、「また行ったり来たりたいへんだし、親もいることだし、産婆さんも知っている人があるから、ほしたらそこで産むわ」、産む支度して行ってね、そうしてその子を産んで3週間目になったら、「じいちゃんがまた召集が来たからまた来い」ってね、電報なんだよね、その時はね。いやあ、今度は行こうと思ったら、いやあ今度は、あんた、雨が降ったためにあっちが山崩れで行けない。磐越西線も行けない。東北本線も通れない。今度は、上越線も通れなくなったの。さあ、どうすればいいか、いつ入隊するか、それも分からないでしょう。ほいで、駅に行ったら、駅の人たちは「毒消しやさん、気の毒だね。どうするや」。どうするや言ったって、どうするたって行けないんだもの、どのみちね。1日ね、そこへ休んでさ。心配して待ってたの。そうして、どうしたらいいさ。おばさんはね、やっぱり「もう戦争に行くんだから、子供の顔でも見たくて電報が来たんだろうから、子供の顔を見せるように行ってこい」って。私のおかあさんは、「もし、おまえが具合が悪くなると、まっと上の子供がいっぱいいるのにそれがもとおまえが具合が悪くなったら、それこそ取り返しがつかないから行くな」ってわけなんだ。1人(ひとり)行けて言うし、1人行くなって言うから、どっちさすればいいのかなってさ。1日中そんな話ししてね、考えてた。そしたら、鉄道の手合いは、「どっちでも、開通しだいに毒消しやさんに知らせるからね」、そう言って。駅に近いから。そう言ってきてさ。そいで、開通なれば聞かせてもらえるわけなんだよね。「どっちにしたって、いっぺん死ねば二度と死なないんだから、どっちにしろはよ帰るわ」、そう言ってね、帰ることになって。今度はじいちゃんの妹がいるんだよ、やっぱり一緒にいてって。その妹が荷物しょって、おれその子おぶってさ。3週間、23日目だったかな、23日目だったね。そう言って帰ってきたん。来たってがね、朝まるでそれこそ6時くらいに乗ったのにさ、夕方6時すぎにやっと着

いたんだよ。鈍行だし、ほら上越回って来たでしょう。あの時ね、急行もなかったんだかな。なんだか、そうして今度はここへ来たわいいが、ほうしたら、ほら、タクシーでもなんでもいいから、バスがないからね。帰ろうと思ったら、「油がなくてね、タクシーは行けない」と言うんだろう。いやあ、どうすりゃあ、ここまで来てね。いつ入隊だか日にちが分からないだろう。しかたがない、今度は川熊さんそこへ。「こういうわけで来たども、とつてもついてないから」、そう言って。「1晩泊めてもらいたい」、そう言ったら、「ああ、どうぞどうぞ」、そう言ってさ。そうして「明日一番のバスで帰るから」、そう言ってね、そこに1晩泊まってさ。そうして今度は来たん。そうしたら、まあだ赤ん坊だもの小さいでしょう、まだ3週間だものね。その子おぶってさ。そうしたら、前のおばさんが出て、「来たのか」って言うから、「いま来たよ」。そう言ったら、何にもない、涙流してこうして泣いているんだよ。「それでも来られて良かったな」、そう言ったから。「うん。元気で来たよ」、そういうふうに言ってやって。そいで家に来たら、「これから弥彦さんにお参りするから、一緒におまえもお参りせえ」って、シュウトさんが言うでしょう。「ここまでやっと来たから、おら弥彦さんどころじゃあない」、そう言ったの。「はよ、家まで来ればね。たくさんすかい。どこへも行きたくないから、はよ家まで来たんだから」、そう言ってね。「留守居してる」、そう言ってね。弥彦参りなんてしたくないんだよ、疲れてね。そうして、今度はね、それからそのあくる日、いや2日になったのかな、来た日から。今度は新発田に入隊だっていうでしょう。入隊だから、明日のうちにいけないと。今度は、ほら、朝の8時だから。ここからじゃ間に合わないから、むこうに行って1晩泊まるってわけさ。で、新発田に行って1晩泊まるってわけ。だから「おまえも新発田に行って1晩泊まれ」ってわけ。「いやあ、新発田どころじゃない。家までやっと来たから、はよここでたくさんだ」、そう言ってね。送ってなんか行かなくなつてさ、ここで子供の顔を見せたりさ、「身体がこわいから、たくさんだ、ここまで来たんだから」。「はあ、来なくなつていい」、そう言うから、結構だと思って、行かないでね。そうしていたの。そうして、所長さんが送って行ってくれた。まったくね、3回召集受けたんだもの。「どうしてあんたのとこばかりね、赤紙が来るんだろう」、なんて、人にね、たまげられたが。やっぱり、ほら、運がよくてね。命のないところに行かなくて。ほら、命があるからね。大東亜戦争に満州のほうから行ったんだらば。スマトラのほうまで行ってさ、ほうして丈夫で帰ってきたんだよ。

<願をかける>

(でも、前の2回召集受けた時は)おじいちゃんが入隊する前に弥彦神社にお参りに行ったん。まったく、家にいない時も商いに出て、今度ばあちゃんのとこに子供を置いて商いに出るでしょう。いやあ、これもないへんだっけどさ。おやじがないから、なおさらね、子供がかわいくて。そう思ったけど、他人でない、ほら、おばちゃんだから。ほら、あれして、見てくれたけどさ。今度、家にいる限りはね、日の丸弁当で。車に乗ると、ご利益がないと悪い、そう言ってね、おにぎりひとつずつや、うめぼし入れてさ、おにぎりして。そうしてね、ずっと

山もとのほうばかり歩いて弥彦参りにね。まあ、いる限りは毎月1か月にいっぺんずつはお参りに行ったんだよ。無事で帰ってもらいたいと思ってさ。

友だちもやっぱり兵隊に行っている人がいっぱい行っているからね。2人で行ったの。あんまり大勢さそったりなんかたいへんだから。「2人で行ってこよう」、そう言って。ずっと山づたいにね、2人でお参りに。家に居る限りはね、毎月お参りに行った。いっぺんずつは弥彦行ったってね、何か食べたり何かすると、ご利益がないと思って、何にもね。それこそそこらに行ったって食べないでさ。そうしてテクテクたかじょ履いて、ゴムタビ履いてお参りしたんだよ。なにもないように、そうやってお願いして。そうして、せつなくなれば神頼みでね。家にいる時はさほどでないけど。でもね、やっぱり自分で随分お世話になったと思うとね、朝は、夕方はそんなにしないけれど。仏様や神様は、おかげさまでこれまで行かせてもらったんだものと思うと、お参りだけは休まないでしますね。それだけ、自分の、だって仕事だものね。そうして、仏様、ほら、自分の親が亡くなってるしさ。ここのおばあちゃんも亡くなっているが、自分の親は位牌もなにもないけど。嫁に来たんだからないけど。それでもね、やっぱり死んだ日を思いだしてや、「なんにももらわなくても、おかあさん、丈夫な身体をもらってくれてありがとうね」、そう言ってね、喜んでお参りするよ。なんにも品物なんかもらわなかったね。身体が丈夫であれば、これほどありがたいのはないと思ってさ。「丈夫な身体をもらってきてありがとうね」、そう言ってやね、仏様に御礼するの。いま、ここにもね。いまでも、そう思ってね。

#### <跡継ぎ>

やっぱり、長男だもの跡継ぎ意識がないわけじゃあないでしょう。長男は男だったからね、なおさらね、長男だと思っていましたよ。農業や漁業を継いでほしいということはなにも、そういう希望は別にあるわけじゃあないけど。やっぱり、跡継ぎだからね。ここに居るんだから。やっぱり百姓もさせなきゃなんないし。漁師もさせなきゃならないと思ってね、いましたよ。だけど、今度は私たちがむこうの若い手合いに委せてから、浜茶屋がやってみたいというわけです。それを、こっちは何もそんなこと考えもしないし、望みもしなかったんだけど。本人どうしがやりたいというもんだから。それをいやだとも言えないからさ、やらせてやらね。本人たちの好きにしくちゃ、何だかんだ言えないからさ。

#### <次男を大学に>

まったく、それでもおかげさまで商いはありがたいもんで。旅の人にはそんなことなんてとつても言う、ほら、なにほどこ儲かるかと思うと悪いからさ。そういう自分でせつない生活しててもね。大学は自分であげたよ（自分の稼ぎで次男を大学に出した）。だけど、長男たちはみんな分かってはいるだろうけど、商いに出ていっている時は先から送金しなくちゃならないでしょう。他人様のところに置いておいてもらっているんだから、毎月ね。それも、やはり、あそこの学校はいっぺんに半年とか一年とかね、払わなかったって1か月ずつでもよかった

の。いっぺんに払うとたいへんだけど、それでも毎月ね、そういうふうには払ってるのさ。ほら、学費だの、下宿代だのさ、そんなことをね。それでも自分でなんとかかんとか。だからそんなにかたくやったわけなんだろうと思うよ、いま考えれば。まるで4年間ばね、じいちゃんと2人で肌着一枚くらいも買わなかったよ。でもね、結構裸でいなかったけどさ。その頃なんて、ツギアテなんてなんとも思わないからね。下なんて見えないから、それこそ本当にね、着ればいい。そこをツギであててみたりなんかしてね。若い人にはあんまりね、せつない思いをさせると、今度は自分の子が学校出てるのに悪いと思ってさ。若い手合いにはそんなことはできないから。自分たちが気をつけなくちゃあとと思って。まあ一ず、本当にね、何も恥ずかしくも、なかったよ。若い時は「あれが流行った、これが流行った」、そう言って着たがるけど、着てて元も払えないのださ、お金もなくてどうとかだなんて、言うよりも、ボロを着てたたって、人に迷惑かけなければ上等だと思ってね。なんにも恥ずかしいことは忘れて。ボロなんてなんにも構わなかった。おかげさまで、まあね、でもよかったよ。

この家建てるのに田畑を売ったけど。(次男を大学に出すのには)一つも売らなかったよ。だって、ほとんど自分で払ってたの。ほいで、そこらの人はたいへんだね、「おばちゃん、大学出してるんだってね。出てるんだってね」、そう言うからね。「家の人はたいへんだろう」って言うから、自分のことなんて、おら絶対言わない。そういうこと(毒消し)で教育したわけだ。家の人もね、行かない時はたいへんなんだよ。今度は、ほら、商いに出ていない場合は、家から出さなきゃならないから、じいちゃんたちもない時は心配しなくちゃならないからたいへんだし。やっぱり大学なんてね、いまならばお金がたいへんだ、とつても出せないしさ。なんだかあの頃安かったしね、それでもなんとか出されたの。そうして、今度は何とか、奨学資金とかいうのを「借りれ」ってばね、「奨学資金なるべく借りたくない」って言うでしょう。奨学資金借りたくないば、どうしようと思っていたったんさ。おかげさまでね、何とかこぎつけてってね、いま県庁に。課長ぐらいになったんじゃあないのかな。

毒消しで働いてくるとね、そんなお金は、そっくり分かんないでしょう。おシュウトさんだったって。儲ける、儲かんないのは分かんないから。そういう時に少しずつね、まあそれでもその時はやっぱりちとは持ってたって、学校へ教育したりなんかしてるからね。へそくりなんてのは全然できなかったが、で、今度は若い手合いにシンショウまかせたら、今度は年とったでしょう。そうすると、今度は若い手合いにいくら働いて来たから、「これだけしかないから」ってやれば、若い手は「まっとよこせ」とも言えないしさ。ね、まだ足んないとは言わないでしょう。だから、まあ、人並に、聞いて人並にしてくれて。あとこの残りは自分でちょっとずつ懐に入れたから。それでもってなんとかね、やってきたん。

#### <家の建設>

毒消しで働いた金で田んぼを増やすところにまでいかなかったの、私は。たった、ほら、ここ嫁もらうのに三夫婦(みふうふ)なったでしょう。ほうすれば、真ん中がいるのに若い手合

いがいるのにさ、私らと同じところに三夫婦そろっているとさ。人が、ほら、なかなか。来る人も、ほら、やだろうし。こっちも悪いでしょう。若い手合いのほうに来たというのに、二夫婦もいる。ああ、今度は真ん中の夫婦のところに来たというのに若い手合いもいれば、年寄りもいれば、今度来る人も悪いと思ってね。そいで、今度ここだけ足して、作ってもらったの。

ここの家は10何年になるね。嫁が来た年作ったんだ。嫁が来るから。12—13年になるかな。なんでもいいからね、柱なんてね。それこそ接ぎ柱（つぎばしら）でもいいから、「部屋だけ建ってもらいたい」、そう言ってね。自分たちだけ別になっていけばまだいいと思ってさ。ほっていたのに、今度真ん中は、今度海水浴場に行ってしまうた。あんなになると思わなかった。夏だけだと思ってた。いま、年間ね。ちっとも来ないの。たまに家には来るけどね。それでなければ。盆は来ないけどね。正月は、31日、1日、2日、3晩ぐらい泊まるかな。はあ、3日の日は帰るからね、むこうに。また2人でいるとね、楽でいいんだろうよ。気楽でね。私らもまたいいよ。若い手えが、そこにいたって、ほら、食べ物や何かはこしらえてもらってさ。また、危ないからね、ガスで火でもあましたりなんかしたらいへんだから。一生若くなっていないから。そう思ってね、食べ物だけは一緒に食べさせてもらって。そうするとね、何にも食べ物の心配もないし。いやあ、誰も火を使う心配もないし。誰も火を使わなかったってね。こんなくらいならさ、電気で危なくないし。ここから、内から行かれるようになっているの。ドアになっているから。だから、とっても都合がいい。年寄りたちがたまに遊びに来るんだよ。また年寄りのところにはね。そうすると、そこからばっかり出入りして、ここなんか出入りすることなかったんだけど。回って来るのたいへんでしょう。むこうからね、来るのもいやだろうと思って。ここから出入りするようになってさ。とっても年寄りたちも喜んで来てくれるしね。私らも都合がよくてね。その代わり、こんなにボロ屋で何にも構わないで、年寄りだから。

<ヨリ>

昔は友だちの小宿（こやど）があったんだよね。ほら、あの、1つくらい違いの。「どこそこヨリだ」、言って。そこの家の名字言ってさ。「ああ、このヨリだ」って言って。宿を、小宿を借りて、ほうして盆、正月なんかになるとね、そこの家を集まって、そうして遊んだもんだよ。いま頃はそういうの、なくなっちゃったよ。

私はオケヤヨリ。そうだね、20何人いたかな。25—26人いたね、きっと。みんな友だちがいなくなっちゃって。ほうして、2組だったでしょう。じいちゃんたちの組とその一級下だから、私たちは。その組と2組いたの。男と女と違ったんだよ。じいちゃんはセワツヨリ。上下（かみしも）、別にあったの（2歳違いが1つのヨリを男女別々につくっていた）。ほんとのね、いまなんて、本当にこうしてなんとかやってくれるのは、私らにね、ツレで、組でなくて、ツレでね。たった2人くらい、はあはあ4人（よったり）いたかな。4人くらい末世（まつよ）の人がいるけど。あと1人は5年も寝たきり。あと1人は杖ついて、やっと家のなかしか、どっ

かへ出られない人。それに、今度もう1人はね、今度何だや、しびれて、足がしびれてどうとかこうとか。こうしておっかかっていたりさ。家のなかにやっという人だ。そんなもんでね。はあ、本当に、まあまあな人とかってようの人。3人か4人（よったり）ですよ。

結婚したたってね、やっぱりお祝い、結婚式のお祝いの時は、みんなそのヨりは寄ってさ。そいで、どこそこヨりの、「今日は誰それは、どこそこヨリだ」って言って。自分の宿家に寄って、そうしてお祝いに来てくれたもんだよ。

やっぱりずっとそうしてさ。そいで、今度いまになれば、そういうのがなくて、たまに一杯ね、「顔会わせしよう」、なんて言ってさ。そういう時もたまにあるしね。お正月でないよ。年寄りだから、あったかくなってからね。そんな時もあるし、またしない時もあるし。

<カケ>

結婚する時のカケはね、4年もあったの。まったくねえ、どう思って、私のおっかさんはこんなにも百姓屋に4年もほう（放っ）て、若いんだもんね、まだね。いまは満で言うけど、昔は数えでしょう。数えなのに、17の年。はやね、ここへ呉れたんだよ。ほうして、今度、それから4年のカケで、今度20（はたち）になって。まだ身体なんて大人にならなかったのに、はあ嫁に呉れたんだよ。まったく、なんでこんなに早く呉れたと思うが。私の親もわけがあったんだろう。

シュウゲン、アシイレちゅうのをしなかったね、私の家じゃあ。私の家じゃあ、アシイレちゅうのをしないで。3年目にシュウゲンしてさ。そうして1年早くシュウゲンして。ほうして、今度兵隊に、ほら、兵隊に、現役に、兵隊に行かなくちゃあならないでしょう。1年早くね。式だけあげたの。で、ここへ来てから兵隊に行って。1年半かな、現役にね。

親どうしの話だけで、本人どうしのなんてね、そんなのないよ。女はどこそこ決まったって言われれば、ほら、人に縛られたようでさ。女は思うような遊びもできないから。私らはできなかったね。うんだけどね、男たちなんてね、何でも好きなことしてられるでしょう、男たちは。名前だけで、顔なんか合わせることもないしさ。どうすることもないんだもの。やっぱり若い時はね。自分で自由に遊びたい人には遊んだりさ、しられるって。女はね、決められたとなるとね、はよね、やっぱりそれだけね、落ち着いてしまうと言うか、落ちてしまう言うんだか、なんだか。そんなで、誰も、そして人も相手にしないでしょ。はあ、決まってるんだから。そういうわけだったよ。4年もたって。多いほうだったよ、4年なんてえのはね。たいいていね、年になれば2年か、3年が普通だったの。若いってのに、大人にならないっていうのに、はあ決めてしまうんだもの。まったく昔の人っていうのはね。

<まごばあちゃん>

村のなかはね、みんな、田舎だから行ったり来たり、遊んだりか何かはする。私はね、まごばあちゃんに育てられたんだよ。おかあちゃんもいたけどさ。おかあさん商いにやっぱり出たでしょう。だから、まごばあちゃんが私と弟を見てくれて。そうして、いたの。

まごばあちゃんはちっとは毒消しに出たでしょうけど。年取れば、今度は、おかあさんが出れば、ほら、子供がやる場がないでしょう。うんだからね、家にいて。家で面倒見てもらってね。なにも百姓でもなんでもないから、それこそ家のまごばあちゃんはおっかながりだね、もう、「蚊に食われるとたいへんだ」、そう言ってね、まるでまだお天とうさまがあるというのに、夕方になるとね、「はよ蚊帳（かや）のなかに入れ、蚊帳のなかに入れ」って、入れられてさ。「百姓のもんもいいなあ」、家に寝てるとやっと人が山から帰るでしょう。「おらも百姓屋の子供になりたいなあ」って、いつまでも起きていられるって思ってさ、いたった。いまになればね、かえてそのほうが良かったらうに、そう思わないんだよね。

<スイカ・サツマイモ売り>

畑ではスイカも作ったし、それからムギ、ナタネ、サツマイモも作ったね。スイカの苗木はカンピョウを使った。それから、カボチャにも接いだね。苗木をおこして、接いでね、連作がだめだから。そうだね、スイカは2反・3反作ったわね。まーるで、お盆に商いで、盆ならいいけどさ。盆に今度帰って来た頃もあったんですよ。旅の、むこうにばかり盆してさ。みんなむこうは休んでお盆様だっているのに。「お墓参りもできなくて」って言って、今度は一頃は帰ったことがあったの。

そういう時になると、今度ね、みんなスイカ売りですよ、家に来ると。リヤカーに引っ張って。リヤカーに引っ張って、まるで朝早くから、はやばや巻まで何する。巻まで行くでしょう。巻の先のザイのほうに行くんだから。でも、お盆のスイカは楽だね。1軒の家で10貫も15貫も買うでしょう。「盆スイカ」って、そう言ってね。盆間際になったら、ほら、みんなお盆になったら東京のほうに行ってる人でも何でもお客様が来るでしょう。そうすると、それを食べさせるんでね。まーるで、10貫目、15貫目、そう言ってね。だから、1（ひと）リヤカーぐらい持っていったって。丈夫な人は50貫も55貫くらい引っ張って行く人もあるけれど。私たちはね、ほんとにいいところで45貫か、40貫か、重たくて。そうして1人だものね。後押しもない何にもない……。

私が帰って来ない時はスイカ作んなかったね。帰って来るようになってから。だって、売る人がないんだもの。おばあちゃんは百姓専門でしょう。商いは絶対行かない人だったからね。ほいで、秋になれば帰って来るでしょう。サツマイモいっぱい作ったんだもの。サツマは秋今度売る人（私）がまた来るからね。あと、それでないばね、夏来ない頃なんてそんな売るものなんて作らなかつたよ。

いや、戻って来た時もあったの。毒消しに出なかった時もあるよ。食料がたいへんな頃だったね。一番たいへんな頃は、出なかったがね。とつてもね米がやかましくて、持っていけないでしょう。配給は、ほら、移動（転居届）持っていかなくちゃいけないでしょう。そういう時はね、何年か休みましたよ。

### <乾物売り>

そうだね。いやあ、ほんとうにたいへんだったんだよ、ここらはね。その頃は塩取りしてたんだよ。暑い時は浜に干して仲間でやったし。あと寒い時は仲間でやるほどのことはできないから、個人で水汲んできてね、馬車で汲んできて、そして家に塩焚きして塩を取ったの。年寄りのばあちゃんたちは、私はまあ若くて、行くような人はいなかったけれど、秋になるとおばあちゃんたちはさ、その時はかあちゃんたちでしょう。私らは嫁だから。そういう人たちは3人ずつよったり、2家族ずつ組んでね。そいで長岡行く人もあれば、今町、そう言ったかな、そういうところに行く人もあればさ。新潟のほうへはね行かなかったけれどね。吉田のほうに行く人もあれば、そうして今度乾物類を売ってさ。いろいろニボシだの、コンブだのさ。それから今度、ほら、漬けたイワシある人はイワシ持っていったり、スジコみたいなのを仕入れてね。そうして今度これをリヤカーに引っ張って、その晩かあちゃんたちは売りに行つてね。泊まって、そこに宿取って、そうしてそこから毎日送ってもらって売ると。そうして、それは今度お金じゃなくて、米と交換ですよ。それは2番米って言った。2番米と交換でね。そして、西川って川があるでしょう。船でね、長岡からそこらまで来てさ、そこまで引っ張りに行つてさ。そこから家に持って来てさ。そして仲間で家の小屋によったり。うちのおばあちゃんなんかは5人組だったかな。5人組でね。そうして今度仲間でリヤカーを1台でなく、何台も持って行つてってね。それから、それに米を、みんな2番米だから、いい米でないでしょう。それをここに来てみんな米ごしらえだ。いい米と悪い米とを分けて、一番悪い米は鶏屋に売って、一番悪い米を鶏屋に売るんですよ。それを売ってお金にして、それを今度みんなで分けるわけですよ。元を出してあるから。元のほうに回すようにね。そうすると、日にちが1か月もいるんだから、10俵も分けるの、2番米でも。それをずっと食べてるんだよ、家ではね。来年の何月頃までも食べてるんだらうね。2番米だからね。そうして、自分で取ったいくらでもない米を取ったのを、来年は大丈夫だったのを見て、今度食べるんだよ。だから、家の米なんてお正月じゃあなければね、食べられなかったの。

年がまだ若いせいか、嫁さんなんてそういうところに行かなかったよ。毒消し売りには出たけどね。若い人はそういうには出ないの。みんなシュウトさんたちが行ったんだよ。乾物は新潟の方から仕入れたんじゃないの。よく分からないけど。

### <シオダンナ>

サツマイモは売ったよ。11月頃から売り始めたね。昔はオキナワなんてのがあったでしょう。白っぽいイモで、あれ早いんだよ。だけど、あれはあまりおいしくない、そう言って。あの頃は貫数さえあがればいいと言うのでさあ、オキナワだのさ……。

巻のほうに売って歩いたよ。だからさ、塩を売るようなお得意さんのところかさ、昔からシオダンナって言って、お得意があったでしょう。塩売った。そんなところへね。みんな行くと顔なじみだから、「持って来たから」なんて。「じゃあ、家で置いていけや」なんて言ってやね。

うちはね、湯頭ってとこ。湯頭がうちのお得意だったね。だから、湯頭に持って行くとね、何でもね、それでもね代が変わってもね、やっぱり農家の人って、かたくてありがたいもんでさ。年寄りのばあちゃんたちもちょっとは売ったんだろうでも、「ばあちゃんたちが来られなくなって来たから」なんて言う。「ああ、そうか今度おまえの番だか」、そう言ってやね。スイカなんかもいっぱい買ってくれた。そこらはね、スイカでも何でも持っていけばね、買ってくれてさ。お得意さんはありがたいもんで、何持って行ったって、それでもね「この人が来たから何でも買わないわけにはいかない」、ようなこと言ってさ、イワシでも何でもそうだね。100円とか、米1升とか。いいかげんにいくでしょう。だから、楽だったよ。町のなかになんて絶対に行かない。町にいたら、やがて半値より安くなるでしょう。時間がたてば買わないし。いっぱい買わないでしょう。ところが農家はね、一臼漬けておいても、ほら、いいからなんて言ってはね、結構いっぱい買ってくれるんだよね。だから減りも早いし。うちは、シオダンナは湯頭と巻の先の赤錆っていうところ。そこを4・5軒してたったね。お得意さんが4・5軒あったよ。湯頭はほとんど部落でね、だいたい知ってたからね。

サツマイモは遅くまで作ったよ。サツマイモはイロリのそばに石でもってね、何て言ったか。その穴に入れておいたんですよ。キチとか言ったかな。うちでもずっと食べなくちゃならないし。それで、春今度苗起こさなくちゃならないから、種芋をそこからとらなきゃならない。そうしてまたそこへ置くとね、イロリのあったかさがあるからね。腐らないんだよね。腐らないでさ、良かったなあなんてってね。入るだけね、そこへ入れてさ。食べきれないから余るんだよね。その頃春だから、売りがいいんだよね。どこの家でもあるわけじゃあないからさ。

私がここへ嫁に来た頃はね、毒消し売りに行ったりなんかしたせい、スイカなんていっぱいつくっていなかった。サツマイモはつくってたね。サツマイモもみんな畑がさかして(盛して)さあ。松林を切ったあとのようなそういう畑が多かった。サツマイモは植えるがいいが、水くれがたいへんだよね。水をかっついて来るの。天秤でね。いや本当にさかしてね、たいへんで、本当に水くれが一番たいへんだった。それと大根ね。水くれがたいへんで、毎日せつなかった。本当にね、かっつく(担ぐ)のがせつなくて。大根はね、やっぱり干し大根にしたりなんかにするから、そんなに生には、そんなに売らないだよ。

業者の人が買ってくれることはその頃はまだなかったん。最近はもう1本も売りに行かなくなってたね、業者が買いに来てくれるしさ。作っている人は毎年のことだから「お得意さん、干して下さい」、なんて言ってって。いっぱいあそこら、こんだやがて干して、たいていお得意さんか、今度農協へも出されるでしょう。だから、いま売るのはね、なににも心配はない。昔は大根あまれば売ったけど、毎日売るようなことなかったからね。

### Ⅲ まとめ

一地方の農漁村で暮らしてきた一人の女性がどのような人生を歩んできたのか、すなわちど

のような仕事をし、村の生活を送り、さらに毒消しの行商をしてきたのかを聞き書きしてきた。彼女の話しから様々なことを引き出すことができる。まず、農漁家における女性、とりわけ嫁の立場から整理してみることから始めよう。

篠田さんの話しを聞いていると、嫁いできた家は農業と漁業をしていたばかりでなく、取れた米や野菜、魚を売って歩き、生計をたててきた。田畑を所有して自作していたので、村のなかではある程度裕福な家であったと思われる。戦前には角田村に産業組合があったが、産業組合は米や野菜、魚などの売買を扱わなかったと言う。そのため、自分たちで売って歩かなければならなかったのである。かつては農業や漁業をしている家が、取れた野菜や魚を売る商売をしてきたのである。そうして売って歩くのは、きまって女性であった。農家や漁家では、女性が家事のほか、生産と生活のすべての面において主要な労働力として働いている。

親から決められた家に嫁に行くにあたって「誰も腹の中から覚えてきた人なんてないんだ。みんなね、覚えてね、やってみてやっと出来るんだ」とか、婿家ではおシュウトさんに「葱売りに行け」と言われている。女性が自分で様々なことを決められずに、家制度のなかで強いられてきた様子が分かる。おシュウトさんが嫁の行商での収入を互いに評価し合っているところは、嫁の家のなかにおける立場を示している。家制度が日常生活の中で具体的にどのような形で表われていたのかを示すものであろう。そうした家制度による嫁の立場を「せつない」と表現している。この言葉は、篠田さんが毒消し売りに出ているなかで遭遇した様々な出来事の体験を思い出して、折に触れて幾度となく用いられている。「家のためだ」と思って、子供を家に置いて遠く毒消し売りに出てきたと語っている。この気持ちは、一面で家制度の縛りに耐えて生きている姿を伝えている。しかし、こうした忍耐に支えられた姿は、けっして受け身でいやいや仕事をしてきたことを意味するわけではない。むしろ、ひたすらがんばって働いてきた姿、たくましく立ち向かっている姿がそこにはある。

行商先での宿の生活を見ると、篠田さんはストーブも買わずに「焚きおとし」にあたり、お金を節約して貯めてきた。こうした姿は、男性が大工などで出稼ぎに出ても酒の飲み代に使ってしまい、稼いだお金を持ち帰れないのと対照的である。このことは、女性が家を身体をはって支えてきたことをよく示している。日本の家は男性が必ずしも大黒柱として支えていたのではなく、女性の縁の下の力によって支えられてきたのである。篠田さんは齢73歳まで行商に出、30キロもある荷物を背負いながら1日7—8軒のお得意さんを回ってきた。「父ちゃんの小遣いや、孫にいろんなもの買ってやったりするぐらひはまだまだ稼ぐさ。」<sup>8)</sup>こうした篠田さんのたくましい姿は、ひたすら耐える女性の側面だけではなく、家を支えている女性のたくましい姿を伝えている。

ところで、篠田さんは行商で稼いだお金の一部を親に手渡す一方で、残ったお金（ホマチと言う）をいろいろなことに充てて使ってきた。お金の使い方のなかで注目されるのは、ほかの事例ではそのお金で田畑を購入したケースがあったが、篠田さんは次男を大学に出すのに用い

てきたことである。行商先では節約して慎ましい生活をし、ボロを着ながら次男を大学に出している。しかし、そうした生活が苦勞になっていない。その理由は、彼女がお得意さんと互いに信用し、付き合っているからなのではないだろうか。これが商売の取引であれば、精神的に疲れて行商自体が長続きしなかったであろう。また、行商の収入が実際かなり高額であったので、十分生活費の足しになりえたからでもあろう。

そして子供を育てるさい、長男には家を継いでほしいと希望し、家に残ってもらっているが、次男には娘とは異なってお金をかけて大学に出している。長男は尋常小学校の高等科を、娘はいずれも尋常小学校を卒業している。このように次男を特別に大学に出したのは、次男自身が希望したからという以外に、次男は家から離れて将来1人立ちして生活しなければならないという気持ちがあった。だからこそ何も衣類を買わずに、次男の教育資金に行商で稼いだお金を回してきたのである。この点は、嫡子である長男とそのほかの子供という区別のほかに、息子と娘、つまり男性と女性という区別があったことを窺わせる。

これ以外のことについて列挙すると、薬の製造元が角田村に5軒あったこと、薬は借金して仕入て帰国後の「元払い」で清算したこと、毒消し売りには5月半ばに出て10月始めに帰ってきたこと、戦後ひと頃はお盆に帰郷したり、あるいは行商自体に行かないことがあったこと、結婚する前にカケとってシュウゲンをあげた後に婿の家に入らずに、実家に2-3年とどまる慣習があったこと、また若者宿ではないが、男女別々に2学年ずつが一緒になって宿を形成し、そうした同輩仲間をヨリと称したこと<sup>9)</sup>などが指摘できる。さらに、売って歩いた方法のなかには、塩と米を交換したり、ニボシヤコンブ、スジコなどの乾物と米(2番米)を交換したこと、それからおかあちゃんたち5人が1組になって乾物やイワシの漬物などを一緒に売り、売りあげを均等に分配していたことなどが注目される。共同が生産面だけでなく、販売面においてもおこなわれていたのである。お得意さんをシオダンナと言うが、彼らから「この人が来たから何でも買わないわけにはいかない」と言われ、代変わりしても継続して購入されていた。野菜や塩を売って歩いた範囲は昔の地域の市場圏の範囲を推定させるものであるが、こうした社会経済的側面の考察については、ここでは詳細に論ずることはできない。さらに資料を積み重ねて、あらためて別稿において整理して論ずることにしたい。

次に、毒消し売りに出ている旅先についてであるが、まず女の子は小学校を終えると母親やオバなどの親方に連れられて、毒消し売りに出かけている。毒消し売りに出かける前には角田村の熊野神社や弥彦神社に祈願に出かける習慣になっていた。それから、毒消しを購入する側の世間からは毒消しを売って歩いていることが貧しいためであると考えられている。世間から貧しいがゆえに行商していると考えられ、同情されていたことが分かる。また、彼女たちも行商がいかに儲かるか、あるいは自分の家がどんなにりっぱかなどについては固く口を閉ざしているが、こうした点も世間の人の同情の上に行商が成り立っていたことを示している。そのほか、乳飲み子を家に置いて行商に出たりしたこと、薬の仕入は角田の製造元から宿先に送って



夫の召集以外にもいろんなことを運の良し悪しで考えている。油の瓶が倒されたり、鑑札を所持していない時に富山の薬売りに捕まること、イワシが売れることなどが運の良し悪しで判断されている。運命論に強くとらわれて生きてきたように考えられる。しかしながら、その運命論は当時の社会状況などに基づいて形成されていることは言うまでもないが、一方でこの世のなかのことに関して、人間の力ではどうしても知り得ないものがあるという人生観・世界観に基づいていると思われる。それゆえ、こうした見方は運命論というよりも不可知論のリアリティを持っていると考えるべきであろう。

篠田さんは毒消しに出かける前に、「神様の、神社のお世話になっていると思って」神社をお参りしている。また、彼女は夫の召集・入隊にあたって神社をお参りしている。「『なんにももらわなくても、おかあさん、丈夫な身体をもらってくれてありがとうね』、そう言ってね、喜んでお参りするよ。なんにも品物なんかもらわなくなつてね。身体が丈夫であれば、これほどありがたいはないと思ってさ。『丈夫な身体をもらってきてありがとうね』、そう言ってやね、仏様に御礼するの。」と亡き母親、つまり仏様に感謝している。篠田さんは神様や仏様のおかげでこんにちの自分があると考えている。「仏様や神様は、おかげさまでこれまで行かせてもらったんだものと思うと、お参りだけは休まないでしますね。」このような考え方は、この世を成り立たせている目に見えない力を想定していることを物語っている。もちろん、こうした考え方は、近代の合理的・科学的思考ではない。むしろ、自然のすべてのもののなかに精霊を想定するアニミズムとつながっている思考であろう。他人を思いやる気持ちや信用を大切にす気持ち、さらに不可知論の社会観などは、人間は大きな何らかの力によって生かされているというリアリティにつながっているのではないだろうか。神様や仏様によって自分が生かされている。篠田さんはそう考え生きてきた。明治生まれの人がついこの前まで、こうした思考を抱いて生きてきたことは注目されてよいだろう。

篠田さんが語る自分の生活史は、家制度下における農家・漁家の具体的状況、かつての地域の経済圏や文化などを知る上で、さらに毒消し売りが作りあげていた「行商文化」を再構成する上で基礎的資料を成している。今後は毒消し売りの生活史の資料を積み重ねることによって、これらについて考察をさらに深めていきたいと思う。

最後に、坂口安吾の歴史観を取り上げ、彼の歴史観との関連において本稿の目指すところを整理して述べておきたい。角田浜に毒消しの取材に訪れた安吾は、『安吾新日本風土記』を書くにあたって、「日本全国を巡って歩き、地方の古老たちの話を聞いて、『日本人の、全く新しい歴史を書きたいんだ』と笹原金次郎に語っている」<sup>10)</sup>。というのは、歴史や制度の意味は常に中央や政治によって庶民に押しつけられてきたからである。こうした正統的な歴史や制度は、しばしば政治的に作られたものであり、庶民の生活から遊離したものであった。その意味において、安吾はこうした日本の歴史を否定し、生きた日本人の生活の歴史を掘り起こそうとしたのである。そうして、富山の薬売りや角田の毒消し売り、飛騨の匠などを掘り起こして歩

いた。安吾が試みようとしたことは、日本の歴史ではなく、「日本人の生きた歴史である」<sup>11)</sup>。彼は、日本の歴史のなかで非農業民が文化形成において果たした役割を重視し、庶民の歴史と生活を定住の視点ではなく、漂泊ないし交通の視点からとらえる視点に立っていた。本稿は、こうした安吾の歴史観に共鳴しつつ、日本人の生きられた歴史と文化を生活史という手法を用いてとらえていこうとするささやかな試みである。

## 付 記

この調査は、1993年度の新潟大学人文学部の「社会学特殊研究」の一貫として、1993年に2日間に渡って実施したものである。本研究に着手したのは1986年から巻町史の関係で、新潟大学教授上田将氏と巻町の漁村の調査に入ったのがきっかけである。なお、当日の参加者は筆者のほかにも新潟大学人文学部の行動科学課程の学生久保智弥、小林昌子、斎川美佳、丹野倫子であった。調査にあたっては、篠田美代さんや区長の小川敏雄氏を始め、これまでたくさんの村人から御協力をいただいた。関係各位に対して謝意を表するものである。

また本研究は、1993年度新潟大学教育研究学内特別経費による研究プロジェクト「新潟県の社会と文化に関する地域比較史研究」(研究代表者 甘粕 健)の分担研究の成果の一部として、ここに発表する。

## 註

- 1) こうした構造機能主義批判の側面に関しては、那須壽「生活世界と社会科学」(『現代思想』6、岩波書店、1993年)などを参照されたい。
- 2) 中野卓「おわりに」中野卓編著『日系人立川サエの生活史』御茶の水書房、1983年、434ページ。
- 3) ここでは色川大吉の民衆史などを念頭に置いている。たとえば、『明治精神史』および『民衆史』(講談社)などを参照されたい。
- 4) 庶民の視点から人々の日常生活をとらえた人に民俗学者の宮本常一がいる。社会学者では、栗原彬の「民衆理性」などの視点が生活者の視点に立っている(『民衆理性と管理社会』新曜社、1982年)。これまでの女性の生活史に関する研究には、類似したものとして瀬川清子の民俗学の研究がある。しかし、本稿の研究は民俗学といくつかの点で相違している。それは、民俗学が日本文化の単一性の前提に立っておこなわれてきたこと、および社会の支配のメカニズム、たとえば階級ないし階層の視点を有していないことなど認識の観点の相違である。こうした認識論上の問題については、別稿において改めて論じることにした。

なお、表記の仕方について注記しておきたい。私たちは話しのきっかけをつくる上で聞ききしながら篠田さんの話を引き出したが、本稿では篠田さんが話した内容を基本的にほとんどそのまま記載している。しかし、本稿と関係がない内容など、一部は省略している。また、数日に及んでいるため、内容が重複しているものもあり、話しの項目を設けて編集をした。また、分かりにくい方言は( )内に標準語で補うとともに、文脈が分かりにくいところは( )で言葉を補った。さらに、話し言葉で書き言葉にならないものがあつたが、できるだけ用いている言葉をそのまま記載するようにした。こうしたことをおこなった背景には、人生の歩みや世界観は、その人が身体化している言葉(方言)でしか語れないと考えられるからにほかならない。

聞き書きそれ自体の問題について記すと、筆者は話者が話す事柄は事実であると考えているわけではない。話しは、経験に基づきながらも想像的に構築されたり、象徴的に表現されたりしている。しかも、話しには語るに値するものが選択されている。聞き書きについては、誰から何を聞くのが重要な問題であることは言うまでもない。こうした点については、栗原彬「野槌の声」（『管理社会と民衆理性』新曜社、1982年）、桜井厚「主観的リアリティとしてのライフ・ヒストリー」（『中京大学社会学部紀要』創刊号、1986年）などを参照されたい。また、「文字の文化」に対して「声の文化」の意義が再評価されつつある。文字を読むことが少ない、話し言葉によって専ら生活している人は文字を読むことの多い生活者とは異なった「心性」を持っている。すなわち、思考と表現が相違していると考えられる（オンク『声の文化と文字の文化』藤原書店、1991年）。この「声の文化」の側面については、今後さらに検討を要する問題である。なお、調査が調査者と被調査者とのダイナミックな自己変革の過程であることを筆者自身痛感しているが、それについては、井上順孝「宗教研究と「出会い型調査」」（『宗教研究』66、1992年）を参考されたい。井上は調査者と被調査者が互いに調査を通して影響を与えあう調査を「出会い型調査」と称している。

- 5) 小村式の「越後の毒消し」（巻町双書、1963年）による。
- 6) 坂口安吾「富山の薬と越後の毒消し<富山県・新潟県の巻>」（『中央公論』1955年、3月、66ページ）。なお、同文は河出文庫『安吾新日本風土記』（河出書房新社、1988年、66ページ）にも所収されている。
- 7) 角田浜の5軒の製造元は、筆者の調査では、大越民蔵（庄屋）と青木正二のほかに、大越末三郎（スナヤマ）と佐藤金治、大越藤次（キチノスケ）の5軒であった。なお、「新潟毎日新聞」3月29日（『巻町史』資料編4、近現代（1）、昭和63年、676ページ）に製造元の名前が出ている。
- 8) アサヒグラフ（6—8、1979年、73ページ）に掲載されている篠田さんの発言。
- 9) 角田浜のヨリの仲間と一緒に厄年に厄払いしたり、お正月に顔合わせしたり、葬式の時に花輪を出したりと生涯に渡って付き合う。現在の若い人はヨリを作っていない。こうした同輩集団は漁村に広く見られるものであるが、これは家制度と原理を異にしており、家制度を弛緩・変容させたりする働きを有していると考えられる。なお、篠田さんはヨリの仲間のことをツレと称しているが、一般的にここでは仲間のことをツレと呼んでいる。

また、隣浜の越前浜は同輩集団のことをツレと称し、宿の屋号をとって宿の仲間のことをモザエモンツレやタレンツレなどと称している。タビから帰ってきてツレに入る時は、豆腐1丁と酒1升を持参する習慣になっていた。なお、亥子連や一三会など同級生どうしであるがグループを作り、現在でも一緒に厄払いし、そのさい神社に奉納したり、正月に懇親会を開いたりして続けている。この点に関して、竹田旦は「兄弟分の民俗」（人文書院、1989年）のなかで、日本社会における同輩集団意味を、タテ関係に対するヨコ関係の側面として取り上げ、その呼称にはツレ、ドーシ、ホウハイ、チングなどがあることを指摘しているが、角田浜のようなヨリという呼称は取り上げられていない。

- 10) 関井光男「日本人の文化の源流に向かって」（『安吾新日本風土記』河出書房新社、1988年、209ページ）。
- 11) 関井、前掲論文、214—215ページ。安吾のように、非農業民の漂泊ないし交通の観点から日本人の歴史と文化、つまり庶民の生きられた生活を新たにとらえかえす試みは、こんにちきわめて意義があると言える。